福山大学
人間文化学部紀要

Journal of the Faculty of Human Cultures and Sciences of Fukuyama University

2022/3

vol.22

福 山 大 学
人間文化学部紀要
第 22 巻　　2022 年 3 月

目　次

［論文］

Web 面接において大学生に求められる「能力」とは何か　―就職情報サイトを対象とした言説分析―
…… 脇忠幸　1

関東に残るメディア遺構――JOAK の建設したラジオ塔
…… 丸山友美　15

妊産婦のメンタルヘルスに係わる要因
…… 日下部典子　28

ふくやま草戸千軒ミュージアムでの心理学式お化け屋敷の取り組み－広島県立歴史博物館と福山大学の博学連携の事例の紹介－
…… 皿谷陽子・石橋健太郎・大杉朱美・宮崎由樹・平伸二　33

福山大学人間文化学部

Journal of the Faculty of Human Cultures
and Sciences of Fukuyama University
Vol.22 March 2022

Contents

[Articles]

What "Competence" is University Students Expected to Have in a Web Interview?:
Discourse Analysis of Employment Support Websites.
Tadayuki WAKI 1

Media Remains in Kanto Area: Radio Pagoda built by JOAK
Tomomi MARUYAMA 15

Factors related to the Mental Health of Pregnant Women
Noriko KUSAKABE 28

A Psychology-based Haunted House Event at Fukuyama Kusado Sengen Museum:
An Introduction to a Case for Museum Museum-University Collaboration between Hiroshima Prefectural Museum of History and Fukuyama University
Yoko SARAGAI, Kentaro ISHIBASHI, Akemi OSUGI, Yuki MIYAZAKI, Shinji HIRA 33

Faculty of Human Cultures and Sciences, Fukuyama University
Fukuyama, 729-0292, JAPAN

Web 面接において大学生に求められる「能力」とは何か
—就職情報サイトを対象とした言説分析—

脇　忠幸
（人間文化学科）

本稿の目的は、就職情報サイトでの「Web 面接」言説を分析することで、大学生に求められる「能力」を明らかにすることである。分析の結果、各サイトは、「対面時と同じ状況を再現・維持する」「「面接」（面接する者 - 面接される者）を滞らせない」よう要求していることがわかった。また、「「違和感」を与えるような悪目立ちをしない」「場を乱さない」「余計なことをしない」よう求めていることも明らかになった。同時にこれらは、先行研究で指摘された汎用性の高い「基礎能力」の内実だと考えられる。

【キーワード　批判的談話研究　コミュニケーション能力　メリトクラシー　社会化】

1. 問題と目的

私たちが生きている「今」の「社会」とはどのようなものだろうか。2022 年の「今」、想起されるのは「コロナ禍」であろう。「新しい生活様式」「ニューノーマル」といった言葉に代表されるように、コロナ禍は私たちの生活に大きな変化をもたらしたとされている。教育現場や企業においてオンラインでのやりとりが増加したことも、そのひとつだろう。総務省『令和 3 年版情報通信白書』（「コロナ禍における公的分野のデジタル活用」）によれば、2020 年 5 月と同年 12 月のそれぞれの時点において、多くの大学生・大学院生がオンライン授業を受講していたという（5 月：95.4%、12 月：87.7%）。同じく『令和 3 年版情報通信白書』（「コロナ禍における企業活動の変化」）では、企業のテレワーク状況にも触れている。それによれば、「企業のテレワーク実施率」は 2020 年 3 月初旬に 17.6%だったものが、1 回目の緊急事態宣言 1)を受けて 56.4%（2020 年 5 月 28 日～6 月 9 日）と 3 倍以上に増加したという。宣言の全面解除後は、2021 年 3 月初旬にいたるまで約 30%の実施率となっている。

このような状況下において、大学生の就職活動・企業の採用過程にも大きな変化が見られた。すなわち、Web 面接の普及である。株式会社ディスコ（2021a）は、2022 年卒業予定者において Web 面接の経験率が 97.9%にのぼったと報告している（2021 年卒：78.5%、2020 年卒：19.7%）。おそらく、Web 面接はコロナ禍以前にも存在した選考形式（Skype などを利用）であろうが、新卒採用にこれほど広がったのは 2020 年以降のことだろう。

「新しいコミュニケーション様式」とでも言うべき Web 面接には、大学生が直面する「今」の社会が色濃く反映されているはずである。換言すれば、そこで求められる（とされる）振る舞いは、社会の成員として期待される「能力」と強く関連していると考えられる。「今」を生きる大学生＝社会の成員＝私たちには、どのような振る舞いや「能力」が期待されているのだろうか。

このことを明らかにするために、本稿では就職情報サイト上の Web 面接に関する言説を分析する。より具体的な目的は次の 2 つである。

1) 現在の日本の就職情報サイト（新卒対象）では「Web 面接」がどのように語られるのか。
2) その語りから見出される、「今」大学生に求められる「能力」とはどのようなものか。

就職活動・採用過程を社会化（socialization）の一過程として捉えるとき、その言説空間には社会の成員としての期待（広義の役割期待）が陰に陽に示されると考えられる。特に、大学生の多くが「就職活動に関する情報の入手先」として多用する就職情報サイト（株式会社ディスコ 2021b）2)には、こうした期待に関わる言説が顕著に出現するであろう。なかでも「コミュニケーション能力」は、企業が「選考時に重視する要素」（日本経済団体連合会 2018）と

して広く知られており、web 面接においても引き続き関連する振る舞いが要求されると推測できる。この追究を通して、コミュニケーションという視点から現代社会の在りようを素描してみたい。

2. 先行研究

2.1. 採用過程に関する言説と企業が求める「能力」

日本の就職情報サイトにおける言説を分析した研究は、管見の限り見当たらなかった。就職情報サイトを対象としたものではないが、類似の目的を持つ資料を分析した研究として岩脇（2004）が挙げられる。これは、東洋経済新報社『会社四季学生就職版』の「採用担当者からひとこと」欄に注目することで、企業の求める人材像に関する言説を分析しようとする試みである。1991 年版と 2001 年版を比較した結果、人材像のトレンドが「個人の内在的資質」（身体属性・人柄や個性）から「実際に役立つ能力の発揮」（能力や主体性）へと移行したことが明らかになった。そしてそれは「実際の成果を生み出す能力や行動へのまなざしの強化」でもあるという。

この「実際の成果を生み出す能力や行動」が大学生により強く求められるとき、それは「即戦力」としての人材像と結びつく。岩脇（2007）では、新卒採用の担当者への聞き取り調査によって企業側が求める人材像を明らかにしている。このなかで新卒採用における「即戦力」は、企業での訓練期間を短くできる能力、すなわち「より高度な基礎能力」を指すとされている。つまり、ここで期待されているのは、何らかの具体的な／個別の業務に対する能力というよりも、どのような業務でも結果を出せる高い汎用性を有した「基礎能力」と考えられる[3)]。同様の指摘はさらに以前から存在する。たとえば、竹内（2016）は 1980 年代後半から 90 年代前半の日本（のメリトクラシー）を分析しているが、大学生に求められるのは「訓練可能性」（入社後、教育訓練を受けて職務に必要な知識・技術を身につけていく能力）であると繰り返し指摘する。すなわち、当時の採用過程においても「どのような職種でもやっていけるということ」が重視されていたことがわかる。小熊（2019）は、こうした仕組み・価値観について、明治期における官庁の「任官補職」原理と軍隊型の階級制度にまで遡れると指摘している。当時の官庁や戦前の陸海軍で重視されたのも、どの任務に配置されても適応できる「能力」であり、高度成長期に定着した「職能（職務遂行能力）」もほぼ同じ内容であるという。このように整理すると、汎用性の高い「基礎能力」が求められるのは、近代社会としての日本が持つ性質・仕組みに深く関わっていることがわかる。

企業はこの「基礎能力」を面接で判断することになるわけだが、岩脇（2007）によれば、この「能力」は具体的な項目（判断基準）として次のように整理できるという。

- 「課題達成志向」…創造性、課題発見力、計画性、実行力、対処能力、貫徹力
- 「自己コントロール能力」…主体性、客観能力、成長意欲
- 「対他者コミュニケーション能力」…他者に働きかける力、チームワーク、リーダーシップ、顧客志向性、自己主張、人間関係構築力
- 「知識・技能」
- 「価値観」（面接者が共感できる価値観を持っている）

一見すると妥当な項目のようであるが、はたして企業＝面接担当者はこれらをどのようにして評価・判断するのだろうか。岩脇（2007）では、「設定された評価事項が実際に評価されているのか確認できない企業」や「評価事項の定義や評価の根拠を言語化できない（※聞き取りの）対象者」（※の部分は脇による補注）が存在したという。たとえば、上記の「対他者コミュニケーション能力」を端的に「コミュニケーション能力」と同一視して考えてみよう。よく知られているように、この「能力」は企業が「選考時に重視する要素」として最も多く挙げる／挙げてきたものである（日本経済団体連合会 2018）。しかし、一般的に流布する「コミュニケーション能力」には内実が伴っていない（脇 2018）。本田（2005）はこうした「能力」を「ポスト近代型能力」としたうえで、これが求められる現代社会の特徴を「ハイパー・メリトクラシー」と呼んでいる。ここで言う「ポスト近代型能力」[4)]とは次のようなものを指す。

・「生きる力」に象徴されるような、個々人に対して多様でありかつ意欲などの情動的な部分を多く含む能力。
・努力やノウハウとはなじまない性格のもの。
・どのように形成されるのかについて社会的に合意されたセオリーはいまだ確立されていない。
・どうすればそれを手に入れられるのか、誰にもはっきりとはわかっていない。

これでは面接担当者が「言語化できない」のも無理はない。吉岡（2018）によれば、実際のところ企業は「コミュニケーション能力」を別の可視的な情報（学歴やクラブ参加）にもとづいて評価しているという。実際の評価基準と大学生に求め（られ）ている振る舞いは必ずしも一致しないのである。今回取り上げたいのは、求め（られ）ている振る舞いであり、Web 面接とはこういうものだ／こういう点に気を配るべきだとされている言説空間である。

これまでの研究で明らかになったことを本稿の目的に沿ってまとめると、次の 3 点になるだろう。①就職情報サイトで「Web 面接」がどのように語られるのかは不明である。②近年の日本における採用過程≒面接では、「汎用性の高い「基礎能力」を持つ「即戦力」であること」が大学生に求められる。③そうした「能力」は、求めている企業側ですら言語化が困難であるような、「どうすればそれを手に入れられるのか、誰にもはっきりとはわかっていない」ものだと考えられる。これらを踏まえて、本稿では①を分析することで、「今」においても②と③が妥当であるのか、汎用性の高い「基礎能力」とは具体的にどのような「能力」を指すのか、検証する。

2.2. 就職情報サイトの社会的機能

前述したように、日本の就職情報サイトにおける言説を分析した先行研究は見当たらなかった。稿者の力量不足もさることながら、おそらくこれは就職情報サイトを対象とした従来の研究が、主にサイトの利用意識や利用動向を追究するものであったことに起因するのだろう。たとえば、下村・堀（2004）によれば、就職情報サイトは学生が就職活動の全体像を把握する有力なツールであるものの、情報探索の際に重視されているのは OB・OG や友人からの情報であるという。そのうえで、就職情報サイトは「OB/OG 情報によって就職活動を上首尾に進められなかった場合に、やむをえず活用し続けなければならない情報である可能性が高い」と指摘している。また、坂元・山下ほか（2017）は、採用過程における就職情報サイトの機能を企業（アピールポイント）と学生（志望理由）のマッチングをサポートすることだとして、その精度を高めるためのモデルを提示している。このように、先行研究では、採用過程における就職情報サイトの機能について（一部、限定的ではあるが）肯定的に捉えられることが多い。長光（2017）は、就職情報サイトのそうした正の影響（順機能）だけでなく、負の影響（逆機能）についても言及している。すなわち、サイト利用率の高さと相関する項目として、「自己利益得点」（就職先の選択に関して自己利益を追求する傾向）の高さや「自己演出得点」（自己 PR や志望動機を誇大演出・創作する傾向）の高さなどが挙げられるという。

今回の主たる目的としては挙げていないが、コミュニケーションから現代社会を素描するにあたり、大学生にとって就職情報サイトとはどのような存在か、その社会的機能はいかなるものかという点も重要な論点になると考えられる。

3. 分析対象と方法

第 1 章で挙げた 2 つの目的を達成するために、本稿では、就職情報サイトが Web 面接に関してどのような説明（助言や注意など）を、どのように提示しているのかに注目して分析を進める。面接というコンテクストにおいて、その語りは必然的にコミュニケーションに関するものになる。すなわち、社会＝私たちが、大学生＝社会の成員＝私たち自身にどのような「能力」を要求しているのかについて、明らかにできるだろう。

今回対象とする就職情報サイトの選出においては、まず Google にて「就活」「Web 選考」[5]というキーワードで and 検索をかけ、その結果として表示された最初の 6 サイトとした（検索結果は 2021 年 10 月 15 日時点）。このと

き、重複ページ（同一ページと見なせるもの）については対象から外した。また、Web テストに関するページやニュース記事も除外した。結果として「マイナビ」のような有名サイトがヒットすることからも、データの代表性に大きな問題はないと考えられる[6]。

①「マイナビ 2023」：「知っておきたい！Web 選考で失敗しないための対策術」
②「リクナビ 就活準備ガイド」：「【オンライン面接（Web 面接）とは？】対面との違い、面接にあたっての準備、練習方法を解説！」
③「JobMedley」：「WEB 面接・動画選考とは？ 実施の流れ、使用ツール、マナー、注意点などを徹底解説！」
④「Diamond online」：「就活生は勘違いしている！Web 面接で人事が見ている重要ポイント」
⑤「東洋経済 ONLINE」：「就活生の成功体験から学ぶ「Web 面接・選考」突破術　リアル同等の準備で 6 月の「本命面接」に備える」
⑥「doda キャンパス」：「Web 面接で失敗しない！場所、背景、服装、回線速度などのマナー」

上記 6 つのサイトで語られる「Web 面接」について、大きく 2 つの観点から分析と考察を試みる。まず、テキストマイニング（KH Coder: ver.3.Beta.04a）[8]によって全体的な言語使用の傾向を掴んだ後、各表現の詳細な分析と考察に移る。テキストマイニングによる分析は、各サイトの本文（記事タイトル・図表・記事の執筆者情報・ページ目次・動画選考のみに関する説明を除く）を対象として、語の出現頻度と、語と語の結びつき（共起ネットワーク）を抽出する。そして、それらの結果を踏まえた各表現の分析は、批判的談話研究（CDS: Critical Discourse Studies）の観点から行われる。CDS に統一的な「方法」が存在しないことはたびたび指摘（自認）される点だが、ここで観点として共有したいのは CDS が持つ認識枠組み、すなわち「権力、受け入れ、排除、従属の社会的プロセスに共通の関心を持っている」「社会の格差や不平等の談話的側面に光を当てる」（Wodak & Meyer2016: 訳書 p.31）ことである。こうしたアプローチによってあぶり出されるのは、「相対的に力を持っていて、その力で力を持っていない人たちを支配し、自分たちの力を強化したり温存したり再生産したりしようと意図する人たちである」（名嶋 2018: p.5）。就職活動において、どのような「能力」をどのように要求されるのか、その過程を明らかにするには、こうした観点が有効であると考える。

4. 分析と考察

4.1. テキストマイニングによる概観

まずは、6 つのサイトでどのような語が多く用いられているのかについて確認しよう。頻出語の上位 20 語をまとめたものが表 1 である。

表 1. 6 つのサイトにおける頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
面接	320	話す	43	学生	37
WEB	108	ポイント	42	通信	35
オンライン	67	選考	41	画面	34
場合	63	相手	41	接続	34
企業	45	自分	40	使用	33
確認	44	準備	40	場所	33
カメラ	43	映る	39		

「面接」「Web」「オンライン」が上位にあるのは、当然の結果であろう。興味深いのは、「場合」が 63 例も抽出された点である。おそらくこれは、この種のサイトが様々な事例＝仮定（もし〇〇な場合）への対応を示す、ハウツー的な機能を果たしている結果だと推測される。「ポイント」が上位にあることからもこうした推測は支持されるだろう。また、「確認」「準備」といった面接以前に関わる語も見られる。何事も「確認」「準備」は大切だが、Web 面接までの振る舞いが強調されているのだと考えられる。オンライン・コミュニケーションには空間や物理的な距離を超えていく性質があると思われるが、そう考えると「場所」という言葉も興味深い。空間の制約や物理的な距離から解放されるはずが、なぜか「場所」について多く言及されているのである。おそらく、「カメラ」「画面」を通して「相手」から見える「自分」を想像するとき、この「場所」が問題になるのだろう。このあたりの議論は、4.2 において改めて分析する。

続いて、語と語の共起関係（共起ネットワーク）について確認しておきたい。頻出語と合わせて見ることで、就職情報サイトの語りが浮かび上がってくるはずである。

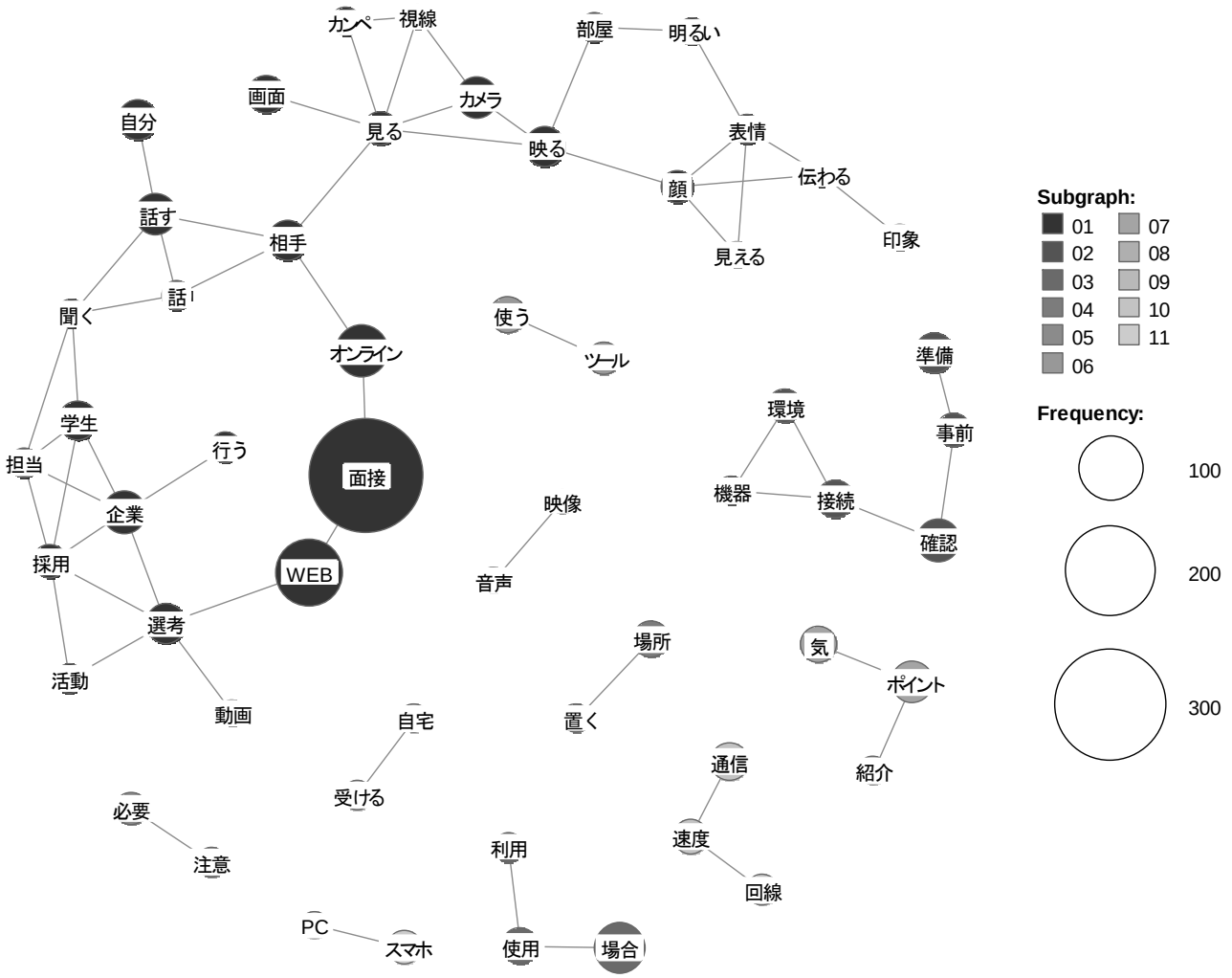


図 1. 6 つのサイトにおける共起関係

前述した全体の頻出語も参照しながら分析すると、就職情報サイトでは「Web 面接」がどのように語られているのかがわかってくる。頻出語上位にあった「確認」は、「事前」「接続」と強い関係が見てとれる。「事前」は「準備」と、「接続」は「機器」「環境」との共起関係を持つことからしても、サイトでは面接当日までに通信環境の「確認」について繰り返し注意喚起がされていることがわかる。また、「カメラ」「映る」「顔」といった共起関係からは、

「顔」「表情」のような非言語的な要素に関する語りが推測される。「部屋」という語も見えることから、「カメラ」に「映る」背景にも言及されていることがわかる。

4.2. 就職情報サイトの言説分析

前節ではテキストマイニングによって全体を概観したが、この節では6つのサイトで語られる「Web面接」言説をより詳細に分析し考察を加える。

4.2.1. 対面時と同じであるということ

各サイトで繰り返し語られることのひとつに、「Web面接は対面での面接と同じである／変わらない」がある。なお、以下の引用部分における下線は稿者によるものである。

- 「質問内容は、対面で行う面接と変わらず、オンライン面接でも話す内容自体に違いはないといえるでしょう」（リクナビ）
- 「面接官の評価ポイントは対面面接と大きくは変わりません。そのため、WEB面接でも言葉遣いや礼儀などの基本的なマナーは、対面同様に気をつけましょう」（JobMedley）
- 「いい意味での緊張感を持って面接に臨むためにも、対面の面接と同様、髪型や服装などの身だしなみを整えることをオススメします」（リクナビ）
- 「対面の面接で相手の目を見て話すのと同様、オンライン面接も相手に視線を向けるよう意識しましょう。」（リクナビ）

従来の面接と同じということであれば、Web面接で求められる振る舞いや「身だしなみ」も従来と同様になるのは当然かもしれない。また、対面時に期待される振る舞いをWeb面接に当てはめることで、新たに「大学生」「面接される人」という役割期待を探る負担は小さくなる。「自己呈示（印象操作）」（Goffman1959）がしやすくなると言ってもよいだろう。しかし、よく考えてみれば、コミュニケーションのメディアが変化したのだから求められる振る舞いや「身だしなみ」が変わってもおかしくない。むしろ、ここで大学生に求められているのは、「対面での面接と同じである／変わらない」ことの実現・維持ではないだろうか。この点について、たとえば次のような言説も見られる。

- 「オンライン面接の担当者はPCを使用するので、縦置きにした場合、画面の両端が黒く切れているように映し出されます。そのため、横置きの方が違和感なく対話を進められるでしょう」（リクナビ）
- 「WEB面接で迷いがちなのが服装です。WEB面接の場合でも、対面でおこなう際と変わらない服装・髪型・メイクにすることをおすすめします。面接官によっては「WEB面接だから身だしなみに気を抜いている」などと受け取る可能性があるので、面接内容以外のことでマイナス評価を受けないようにしましょう」（JobMedley）

ここで語られる「違和感なく」「変わらない」は対面での面接が比較対象であり、もし面接官に「違和感」を与えれば「気を抜いている」として「マイナス評価」につながるとの認識が示されている。こうした対面時と同じ環境作りは、企業側への配慮（スムーズに面接をしていただけるように）でもあり、「違和感」を与えるような悪目立ちをしない、いわば危機管理でもある。「今」の大学生にはこうしたことが（評価の対象となる）「能力」として求められているのだろう。

しかし、前述したように、コミュニケーションのメディアが変化した以上、どうしても対面とオンラインでは異なる点が出てくるはずである。興味深いのは、各サイトにもこうした「Web面接は対面での面接と異なる」という言説

が確認できる。すなわち、Web 面接は従来と「同じ」でありながら「異なる」というのである。

- 「直にあって行われる選考との違い」「WEB 選考（動画選考）で特に気を付けたい点」（マイナビ）
- 「大きく違うのは、「機器を使う」「画面越しでコミュニケーションを行う」という 2 点」（リクナビ）
- 「撮影場所によっては天候や時間帯の違いにより、被写体への光の当たり方も変わります。それによって、影ができてしまい表情が見えにくかったり、顔全体が暗くなったりしてしまうことがあるので注意が必要」（マイナビ）
- 「画面越しだからこそ、映像に映った印象、少ない情報で全てが決まります。特に第一印象は重要」（マイナビ）
- 「表情を明るく保って話していても、部屋の照明が暗いと相手からは表情も暗く見えてしまうため、可能な限り部屋が明るくなるように準備しましょう」（doda キャンパス）

このように、「異なる」として語られるのは機器に関する言説である。そしてそれは、非言語的な要素に関する語り、なかでも表情に関する語りを生み出す。図 1 において「場所」が「顔」「表情」「行う」と強い関係にあったことも考慮すると、就職情報サイトでは Web 面接時（の画面）にどのように見えるか／どのように見せるかについて語られることがわかる。もちろん、対面時についてもこうした語りは見られるだろうが、表 1 のように「カメラ」「画面」の存在が繰り返し語られることで、「顔」「表情」の語りが次々と生成されるのだと考えられる。

4.2.2. 通信環境の整備と自己責任

前節では、大学生が「顔」「表情」に意識を促され、対面時と「同じ」であるよう求められる様子が垣間見えた。こうした言説は通信環境に関する言説へと結びつく。「顔」「表情」が明るく映し出され、「違和感」なく面接が進むためには、通信環境の整備が重要になってくるというのである。

- 「WEB 面接接続テストの確認ポイント」（JobMedley）
  相手の音声の確認（音量は適切か、タイムラグがないか）
  相手の映像の確認（映像の乱れ、タイムラグがないか）
  自分の音声の確認（声を拾っているか、雑音が入っていないか）
  自分の映像の確認（映像の乱れがないか、不要なものが映っていないか、カメラ目線になっているか）
  インターネット回線は安定しているか
  部屋の明るさは足りているか
- 「通信速度は、bps（ビーピーエス）という単位で表し、1000bps が 1Kbps、1000Kbps が 1Mbps となります。高画質の動画を快適に閲覧するには 25Mbps 程度の通信速度が必要だと言われています。」（マイナビ）

4.1 で「確認」が頻出語として挙がっていたことも合わせて考えると、通信環境の整備は大学生に求められる「能力」になっていると言えるだろう。単に確認が促されるだけでなく「bps」のような知識も示されることで、わからない／知らないとは言えない状況が生成されていく。万が一にも通信トラブルが発生すれば、それは学生の責任になってしまう。

よくあるのが“本番に限って”問題が発生するケース。就活生のコメントにも、「いつも使っているパソコンなのに音声がでなかった。またイヤホンのマイクが接続できなかった」（文系女子）、「パソコンをひ

らいたらアップデートが自動で始まってしまい、入室に遅れそうになってしまった」（文系女子）というような事例が報告されている。

さらに、「ノートパソコンを電源に繋ぎ忘れて、討論中に電池切れになりかけた」（理系女子）、「イヤホンなしで参加したら、自分のマイクをオンにするたびにハウリングが起きてしまった」（理系男子）、「カメラで映る範囲が分からなくて、部屋全体が映ってしまった」（理系女子）など、準備不足や不慣れが原因でさまざまなトラブルに遭遇している。

もし最終面接でそんな事態になったら、それまでの苦労が水の泡になりかねない。（東洋経済 ONLINE）

就職情報サイトでは、通信状況の悪化や不具合がまるで個人の責任＝「能力」であるかのように語られる。事前確認を十分にしても「本番に限って」問題が起きれば、それは学生の責任（「水の泡」））になってしまうのである。こうした通信トラブル＝自己責任を志向した言説空間は、学生にとって非常に過酷なものだろう。汎用性の高い「基礎能力」のなかに通信環境の整備・保全という「能力」まで組み込まれてしまっては、たとえば経済的に Wi-Fi 環境を整えられない学生は排除されかねない[9]。

通信環境に関する言説からもわかるように、大学生には対面時と同じ状況を再現・維持する「能力」が徹底的に求められる。換言すれば、これは「面接」（面接する者 - 面接される者）を滞らせない「能力」である。この「能力」の評価が汎用性の高い「基礎能力」を測ることであるなら、それは「場を乱さない」「余計なことをしない」という「能力」を共示（connotation）とするのではないだろうか。

4.2.3. 画面に映る背景と私的空間

ここで取り上げるのは、各サイトで繰り返し語られる、画面に映る大学生の背景（自宅の様子）に関する言説である。これは Web 面接に限らず、コロナ禍以降よく見聞きする言説だろう。

- 「せっかく自分の身なりを整えて臨んでも、映り込む背景が気になって面接官が集中できないなんてことがないよう周囲の環境へも気を配りましょう」（マイナビ）
- 「できれば無地の壁をバックにしてセッティングしましょう。私物が背景に映る場合、移動させたり、布などで隠す配慮を。面接官は背景に映っているものから、あなたのことを想像します。」（マイナビ）
- 「相手に余計な情報を与えない方が会話そのものに集中してもらえるので、シンプルな壁など映り込みの少ない場所を選ぶ方がいいでしょう」（リクナビ）
- 「おすすめは、部屋の壁、もしくは白などの淡色系のカーテンを背にして撮影する方法です。ポスターなどが貼ってある場合は剥がし、風でカーテンが揺れないように窓は閉めます」（JobMedley）
- 「自宅の様子が映り込んでしまう場合は、必ず整理整頓をしましょう。散らかったままの部屋だと「仕事も雑然と取り組むのではないか」と面接官に思われかねません。少なくともカメラに映る範囲内は、きれいに見えるように整えましょう」（JobMedley）
- 「Zoom の「バーチャル背景」を利用すると、自分の背景を好きな画像に変更することができます。どうしても部屋を見せたくない場合には使用を検討してもいいですが、「部屋を映せないほど散らかっているのか」などと面接官に憶測される恐れがあるので、使わずに済むのが一番です。もし使用する場合は、白の無地や室内の写真など、面接の妨げにならないシンプルな背景を選びましょう」（JobMedley）

これらの言説を見るとわかるように、各サイトでは「白」「無地」の背景を推奨している。その理由は「面接官が集中できない」「面接官は背景に映っているものから、あなたを想像します」とされているが、この理由が意味するものもやはり「場を乱さない」「余計なことをしない」ことの要求であろう。これは次の言説に見られるように、できるだけ「無難」であれ、という要求でもある。

・マイク付きのイヤホンやヘッドセットがあると、自分の声をクリアに伝えることができ、相手の声を聞き取りやすくなるでしょう。ただし、デザインが奇抜だったり大き過ぎたりすると、面接担当者がそこに注目して会話に集中してもらえない可能性があります。目立たないデザインや大きさのものを使用する方が無難でしょう。（リクナビ）

改めて考えてみると、こうした言説空間は実に奇妙ではないだろうか。一方では私的空間を秘匿するように求めながら、もう一方では「ガクチカ」（学生時代に力をいれたこと：東洋経済 ONLINE）に象徴されるような「素」が評価されるのである。

・「ある人材系企業の採用担当者は、「面接官と視線を合わせず、他のところを見ているように感じることがある。そういう場合は、事前準備が難しいような質問をスピーディに投げかけて、なるべくご本人の素の部分が理解できるように努めている」と語る」（東洋経済 ONLINE）
・「オンライン面接を受けるのは「その会社で働きたいから」であり、対話をしているのは、「自分の魅力やいいところを最大限に知ってもらうため」なのです」（リクナビ）

「素」「自分の魅力」の評価を認識枠組みとして示しておきながら、私的空間＝「素」の秘匿を要求する。こうした言説によって生成される〈現実〉は、大学生にとって「ダブルバインド」（Bateson et al.1956）に他ならない。人生の岐路とも言える就職活動において、ダブルバインド状況を乗り越える「能力」が求められているのだとすれば、大学生にとって実に過酷な状況だと言わざるを得ない。

おそらく、大学生はこうした状況を自己呈示によって解消していると考えられる（小山 2012）。つまり、「大学生」「面接される人」の役割期待に応えることで、フェイス（Goffman1967）としての「素」を演じているのである。もし企業側もこれを承知の上で、いわば共犯関係なのだとすれば、大学生に求められる「能力」は「素」を演じることだと言えるのかもしれない。

4.3. 私たちが求める／られる「能力」と「今」の社会

最後に総合考察として、「今」の大学生に求められる「能力」について、「社会化」という観点からもう少し考察を加えておこう。

Berger & Luckmann（1966）は、「社会化」を「社会ないしはその部分の客観的世界のなかへ個人を包括的かつまた調和的に導きいれることである」（訳書 p.198）と定義したうえで、「第一次的社会化」と「第二次的社会化」という段階に分けている。「第一次的社会化」とは「個人が幼年期に経験する最初の社会化のことであり、それを経験することによって、彼は社会の一成員となる」（訳書 p.198）とされ、いわゆる第一次集団（例：家族）での社会化を意図していると考えられる。「第二次的社会化」は、「すでに社会化されている個人を彼が属する社会という客観的世界の新しい諸部門へと導入していく、それ（※第一次的社会化）以後すべての社会化のこと」（訳書 p.198：※の部分は脇による補注）を指す。「第二次的社会化とは、直接にしろ間接にしろ、分業に基礎づけられた役割に特殊な知識の獲得である、といってよいであろう」（訳書 p.210）という点からしても、大学生の就職活動は「第二次的社会化」として捉えることができよう。

では、大学生に求められる「分業に基礎づけられた役割に特殊な知識」すなわち「能力」はどのようなものか、ということが本稿の目的であった。ここまでの議論を振り返ると、それは「「違和感」を与えるような悪目立ちをしない」「対面時と同じ状況を再現・維持する」「「面接」（面接する者 - 面接される者）を滞らせない」「場を乱さない」「余計なことをしない」ということになるだろう。先行研究の文脈に沿って考えれば、これらが汎用性の高い「基礎能力」の内実として位置づけられるということでもある。あるいは、企業が最も強く求める「コミュニケーション

能力」の内実だと言ってもよいだろう。就職情報サイトは、こうした「能力」が求められているという言説と〈現実〉を生成することに寄与しているのである。

こうした現代社会の在りようをどのように考えればよいのだろうか。大学生は就職情報サイトが提示する〈現実〉に一方的に絡めとられているわけではなく、その社会的な役割（「大学生」「面接される人」）のなかで主体的に演技・実践していると、いくらか肯定的に捉えることも可能だろう（小山 2012）。しかし、その演技・実践の枠（役割期待）を生成し、そのなかから大学生に選択させている＝大学生を「主体」化しているのはこうした就職支援サイトであり、それを介在させる企業であり大学である。まるで就職活動には外部が存在しないかのような語りで、大学生から「ほかでもあり得る／あり得た」という思考を奪っているのではないだろうか。「今」の大学生は、他者（周囲の大学生）との絶えざる比較を通して就職活動へと駆り立てられ（妹尾 2016）、事前に就職情報サイトの言説を思考の前提＝フレーム（frame）にすることで、思考ができなくなっている／思考する必要が無くなっているように見える。くわえて、このような思考停止状況に自分自身をすすんで差し出しているようにも見える。

竹内（2016）は 1980 年代後半から 1990 年代前半の社会状況を分析したうえで、次のように指摘している。

> メリトクラシーはディレンマである。多数は敗者となるにもかかわらず、勝利の夢だけをあたえるゲームなのだから。加熱が強力に作動するメリトクラティックな選抜をそのまま放置すれば、形式的平等と事実的格差の断差によってルサンチマンの負荷が増大する。欲望が際限なく駆り立てられるアノミーも昂進される。（p.65：「断差」は本文ママ）

30 年以上経った今もこの「加熱」は変わらず存在する。就職支援サイトが生成する言説はこれを助長しているのではないか。一方で、今回の調査では、このようないわば従属論を相対化する言説も見受けられた。

> 最近、採用担当者から悩みとしてよく聞くのが、学生の自社への本気度や熱意、本音が見えにくいという声。そして、自社に合うかという雰囲気を見極めるのも難しいようだ。
>
> 学生の多くは就活するにあたって、「企業に落とされないようにするには、どうすればいいか」ばかり考えていて、自分は企業よりも“弱者”だと思っているかもしれない。しかし実際のところ、企業側も「学生に選んでもらえるだろうか」と選考や内定を辞退されることに不安を感じている。必ずしも採用において、企業は“強者”ではないのだ。（Diamond online）

同様のことは先に触れた小山（2012）でも指摘されており、こうした学生と企業の対称性に関する議論は押さえておくべき点であろう。たしかに、学生が企業を吟味・選択する段階（選ぶ - 選ばれる）においては、学生に主導権があるかのように見える。しかし、それをもって両者の関係全体を対称とするのは無理があるだろう。就職活動が社会化の一過程として重要視されることで、学生はどこかの企業（＝就職）を選ばざるを得ない状況にある。また、内定を断るにしてもまずは「合格」する必要がある。さらに、岩脇（2007）は面接の場でのコミュニケーションの権限（entitlement）が企業側にあることを指摘しているが、Web 面接の場でも同様であろう。やはり企業と学生は非対称的な関係にあると考えるのが妥当ではなかろうか。前述したように、学生が役割期待に収まる形で方略的（strategic）に行為実践しているのは首肯するところだが、それはあくまで役割期待に収まる範囲での話である。就職情報サイトが生成する役割期待や求められる「能力」に「主体的に」従うことで肯定的に評価されるのであれば、もはや悲劇を通り越した喜劇でしかない。

> 大切なのは、コロナ禍という逆境に負けず、どれだけ前向きに、そして主体的にがんばることができたか。（東洋経済 ONLINE）

5. おわりに

本稿では、日本の就職情報サイトでの「Web 面接」言説を分析することで、「今」大学生に求められる「能力」とはどのようなものかについて考察を加えた。各サイトは、Web 面接が従来の対面時と同じであると繰り返し語り、通信環境の整備は大学生の責任であると暗に示すことで、「対面時と同じ状況を再現・維持する」「「面接」（面接する者 - 面接される者）を滞らせない」よう要求していた。また、画面に「素」を持ち込まないよう語ることで、「「違和感」を与えるような悪目立ちをしない」「場を乱さない」「余計なことをしない」よう求めていた。これらの実践こそが、「今」の社会で求められる「能力」であり、先行研究で指摘された汎用性の高い「基礎能力」の内実だと考えられる。言うまでもなく大学生は社会の一員である。就職活動を社会化の一過程として捉えるとき、Web 面接で求められる「能力」は、社会＝私たちが、社会の成員＝私たち自身に求める「能力」でもあるだろう。

しかし、改めてこのようにまとめてみても、結局のところ私たちは「何を」評価しているのか／されているのか、明確に説明できたとは思えない。先行研究で指摘されてきたように、就職活動で語られる「能力」は今もなお「はっきりとわかっていない」のだと考えられる。たとえば教育現場では、この評価という行為／出来事の曖昧さを解消するために「能力」が持ち込まれたと捉えうるが（樋口 2010）、その「能力」によって現場はますます混迷しているようにも見える。現代社会の「能力」言説について、中村（2018）の「いま人々が渇望しているのは、「新しい能力を求めなければならない」という議論それ自体である」という指摘は非常に示唆に富んでいる。今後は、「能力主義（メリトクラシー）」の議論により深く分け入る必要があるだろう。今回は結果として就職情報サイトに批判的な議論になったが、就職活動という社会化の過程には大学も大いに関わっている。また、それを期待する大学生とその家族もいる。この共犯関係の追究も今後の課題だろう。

註

1) 初めての緊急事態宣言は、2020 年 4 月 7 日に東京・神奈川・埼玉・千葉・大阪・兵庫・福岡の 7 都道府県へ発令され、その後、同年 4 月 16 日に全国へと対象を拡大した。同年 5 月 14 日に大半（39 県）の宣言は解除され、全地域の宣言解除は同年 5 月 25 日であった。
2) 株式会社ディスコ（2021b）によれば、「就職活動に関する情報の入手先」として最も多くの大学生が挙げたのは、「就職情報サイト」であった（2022 年卒：94.9%、2021 年卒：92.4%、2020 年卒：93.7%）。
3) こうした指摘は、日本における近年の雇用形態に関する議論も想起させる。すなわち、濱口（2013）による「ジョブ型」（仕事の性質や内容に対して人を割り当てる：欧米の雇用形態）と「メンバーシップ型」（個人の特性や特長に対して仕事を割り当てる：日本の雇用形態）の分類である。この分類については報道でも繰り返し取り上げられ、その後の議論（たとえば小熊 2019）にも影響を与えている。しかし、今回はあくまで採用過程（なかでも就職情報サイトにおける「Web 面接」言説）の分析であり、就職・入社後の状況にまで立ち入らない。
4) 本田（2005）は「ポスト近代型能力」のひとつとして「コミュニケーション・スキル」も挙げている。また、松下（2010）では「ポスト近代型能力」を批判的に乗り越える概念として「新しい能力」を提示している。これは、「1980 年代以降、特に 90 年代に入ってから、多くの経済先進国で共通して教育目標に掲げられるようになった能力に関する諸概念」（松下 2010）とされ、日本での事例として「生きる力」「リテラシー」「人間力」「社会人基礎力」「学士力」などが挙げられている。この概念の特長は、「ポスト近代型能力」や「ハイパー・メリトクラシー」の議論（高校・大学の専門教育を想定）よりもカバーできる範囲が広く、「能力」概念が持つ全体性（「垂直軸（深さ）」と「水平軸（広さ）」という 2 つの軸）を前提にしている点にあるという。詳細な概念整理は別の機会に譲るとして、ここで確認しておきたいのは、日本以外の「多くの経済先進国」でも「ポスト近代型能力」に類した「能力」が語られるようになったという点である。すなわち、こうした「能力」の在りようとその分析・結果は、ある程度普遍性を有するということである。
5) 「Web 面接」とせずに「Web 選考」としたのは、上位概念である「Web 選考」をキーワードとすることでより広く言説を収集できると考えたためである。「Web 面接」での検索によって結果が大きく変わるとは思わないが、検

索キーワードの吟味については今後の課題としたい。

6) HR 総研（2021）によれば、大学生（2022 年 3 月卒業予定）が最も活用している就職ナビは文系・理系ともに 1 位「マイナビ」であるという。

7) KH Coderについては、樋口耕一氏によるHP（https://khcoder.net/dl3.html, 最終閲覧日：2022年1月16日）を参照のこと。

8) 各サイトでは、自宅の通信環境に不安がある場合の対応として、インターネットカフェの個室利用を勧める。しかし、これも結局は大学生の自己責任へと帰着させる論理だろう。

調査対象としたサイト URL

マイナビ 2023.2021.「知っておきたい！Web 選考で失敗しないための対策術」
https://job.mynavi.jp/conts/2023/web_interview/（2022 年 1 月 11 日最終閲覧）

リクナビ就活準備ガイド.2021.「【オンライン面接（Web 面接）とは？】対面との違い、面接にあたっての準備、練習方法を解説！」https://job.rikunabi.com/contents/interview/13973/（2022 年 1 月 11 日最終閲覧）

JobMedley「WEB 面接・動画選考とは？ 実施の流れ、使用ツール、マナー、注意点などを徹底解説！」
https://job-medley.com/tips/detail/1151/（2022 年 1 月 11 日最終閲覧）

Diamond online「就活生は勘違いしている！Web 面接で人事が見ている重要ポイント」
https://diamond.jp/articles/-/262802（2022 年 1 月 11 日最終閲覧）

東洋経済 ONLINE.2021.「就活生の成功体験から学ぶ「Web 面接・選考」突破術　リアル同等の準備で 6 月の「本命面接」に備える」https://toyokeizai.net/articles/-/431149（2022 年 1 月 11 日最終閲覧）

doda キャンパス「Web 面接で失敗しない！場所、背景、服装、回線速度などのマナー」
https://campus.doda.jp/career/job/000204.html（2022 年 1 月 11 日最終閲覧）

引用文献・URL

Bateson, G., Jackson, D. D., Haley, J., & Weakland, J. H. 1956. Toward a theory of schizophrenia. *Behavioral Science* 1, pp.251-264. （＝佐藤良明訳 2000「精神分裂症の理論化に向けて」ベイトソン, G.『精神の生態学』（改訂第 2 版,）新思索社, pp.288-319.）

Berger, P.L. & Luckmann, T. 1966. *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*. New York: Doubleday & Company. （＝山口節郎訳 2003『現実の社会的構成　知識社会学論考』新曜社）

株式会社ディスコ.2021a.「2022 年卒 7 月 1 日時点の就職活動調査：キャリタス就活 2022 学生モニター調査結果」
https://www.disc.co.jp/research_archive_category/student/?data=2022（2022 年 1 月 16 日最終閲覧）

――――――――.2021b.「2022 年卒 1 月 1 日時点の就職意識調査：キャリタス就活 2022 学生モニター調査結果」
https://www.disc.co.jp/research_archive_category/student/?data=2022（2022 年 1 月 16 日最終閲覧）

――――――――.2021c.「2022 年卒 6 月 1 日時点の就職活動調査：キャリタス就活 2022 学生モニター調査結果」
https://www.disc.co.jp/research_archive_category/student/?data=2022（2022 年 1 月 16 日最終閲覧）

Goffman, E. 1959. *The Presentation of Self in Everyday Life*. New York: Doubleday & Company. （＝石黒毅訳 1974『行為と演技―日常生活における自己呈示』誠信書房

――――――.1967. I*nteraction Ritual: Essays in Face-to-Face Behavior*. New York: Doubleday & Company. （＝広瀬英彦・安江孝司訳 1986『儀礼としての相互行為』）

濱口桂一郎.2013.『若者と労働―「入社」の仕組みから解きほぐす』中公新書ラクレ

樋口太郎.2010.「能力を語ること―その歴史的、現代的形態」松下佳代（編）『〈新しい能力〉は教育を変えられるか―学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房, pp.45-79

本田由紀. 2005.『多元化する「能力」と日本社会　ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT 出版

HR 総研.2021.「HR 総研×楽天みん就：2022 年卒学生の就職活動動向調査」https://hr-souken.jp/research/2771/（2021 年 10 月 15 日最終閲覧）
岩脇千裕.2004.「大学新卒者採用における「望ましい人材」像の研究―著名企業による言説の二時点比較をとおして―」『教育社会学研究』74, pp.309-327.
――――. 2007.「大学新卒者採用における面接評価の構造」『日本労働研究雑誌』567, pp.49–59.
小山治.2012.「学生による企業の採用基準の認識過程―社会科学分野に注目して―」『年報社会学論集』25, pp.73-83.
松下佳代.2010.「〈新しい能力〉概念と教育―その背景と系譜」松下佳代（編）『〈新しい能力〉は教育を変えられるか―学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房, pp.1-42
長光太志.2017.「就活サイトを活用する学生に関する一考察」『佛大社会学』41, pp.17-29.
名嶋義直.2018.『批判的談話研究をはじめる』ひつじ書房
中村高康.2018.『暴走する能力主義―教育と現代社会の病理』ちくま新書
日本経済団体連合会. 2018.「2018 年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」https://www.keidanren.or.jp/policy/index09b.html（2022 年 1 月 21 日最終閲覧）
小熊英二.2019.『日本社会のしくみ　雇用・教育・福祉の歴史社会学』講談社現代新書
坂元哲平・山下遥ほか.2017.「就職ポータルサイトにおける企業のアピールポイントと学生の志望理由のマッチング分析モデルに関する一考察」『情報処理学会論文誌』58-9, pp.1535-1548.
妹尾麻美.2016.「就職活動を行う大学生が持つ、同時に活動する他者に対する認識：「同時期」に「一斉」に活動することは彼らにどのような影響をもたらすのだろうか？」『年報人間科学』37, pp.17-33.
下村英雄・堀洋元.2004.「大学生の就職活動における情報探索行動 : 情報源の影響に関する検討」『社会心理学研究』20-2, pp.93-105.
総務省.2021.『令和 3 年版情報通信白書』https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/（2022 年 1 月 16 日最終閲覧）
竹内洋.2016.『日本のメリトクラシー　構造と心性〔増補版〕』東京大学出版会
吉岡洋介.2018.「大卒就職機会における学校歴仮説とコミュニケーション能力―インターネット・パネル調査による計量分析の試み―」『ソシオロジ』191, pp.3-20.
脇忠幸.2018.「「コミュニケーション能力」言説の内実とその背景―新聞読者投稿欄をデータとして―」『福山大学人間文化学部紀要』18, pp.1-17.
Wodak, R. & Meyer. M (eds.). 2016. *Methods of Critical Discourse studies (3rd edition)*. London: Sage. (=2018, 野呂香代子ほか訳『批判的談話研究とは何か』三元社

What "competence" is university students expected to have in a web interview?
: Discourse analysis of employment support websites.

Tadayuki WAKI

The purpose of this paper is to clarify the "competence" required of university students by analyzing the "web interview" discourse on employment support websites. As a result, we found out that each website required them that the same situation as in the face-to-face interview be reproduced and maintained, and that the interview not be delayed. And this result indicates that each website requires them to " not make the interviewers feel uncomfortable," "not disrupt the scene," and "not do anything unnecessary." These are the actual condition of the versatile "basic competence" pointed out in previous studies.
【Keywords: critical discourse studies, communication ability, meritocracy, socialization】

関東に残るメディア遺構――JOAK の建設したラジオ塔

丸山　友美
（メディア・映像学科）

本稿は，三つの観点から 1932 年以降に AK 主導で建塔されたラジオ塔に検討をくわえていく。第一は，聴取加入者 100 万突破の記念事業を AK 総務部企画課の活動から問い直すことである。第二は，横浜の野毛山公園に建設されたラジオ塔を観察することである。第三は，「一戸一受信機」キャンペーンの広告“塔”として国内外に建設されたラジオ塔について検討することである。以上の作業を通して本稿で明らかになるのは，ラジオ塔が「場所」の固有性と密接な関係性を築くモノから，その場所に建設された理由や由来が国家政策に絡め取られた「非-場所」なモノへ変容していくプロセスである。

【キーワード　ラジオ塔　メディア遺構　JOAK　プロダクション・スタディーズ】

１．「常設受信拡大装置」としてのラジオ塔から，「公衆用聴取施設」としてのラジオ塔へ

JR 桜木町駅の南改札を抜け，すぐ目の前にあるエスカレーターを下って「野毛ちかみち」を通り過ぎ，南１口にあるエスカレーターに乗って地上に出ると「動物園通り」があらわれる。この道をまっすぐ進むと，やや急勾配な野毛坂にぶつかる。息の切れるこの坂を登った先に現れるのは，横浜市中央図書館や横浜市立野毛山動物園，そして日本初の近代水道である横浜水道を完成させたイギリス陸軍のヘンリー・スペンサー・パーマーの碑がある野毛山公園である。春には約 250 本の桜が咲き誇るこの野毛公園からは，ランドマークタワーやよこはまコスモワールドなどを擁するみなとみらい 21 地区を一望できるということもあり，横浜に暮らす市民だけではなく，多くの観光客が足を運ぶ観光名所になっている。

そのように多くの人々が訪れる野毛公園の片隅に，社団法人日本放送協会の関東支部（以下，AK）によって建設されたラジオ塔が，今も一基残っている。一見すると灯篭と見間違えるからだろうか，この建造物が「ラジオ塔」であることを今に伝える解説文を付した案内板が設置されている（図１，図２）。そこでは野毛山のラジオ塔建設の経緯が，次のように紹介されている。(1)

ラジオ塔
このラジオ塔はラジオの聴取契約者が百万人を超えた記念に日本放送協会が昭和七年に全国の著名な公園や広場に建てる計画が進められ昭和七年度から昭和八年度中に四十一箇所が完成してその中に野毛山公園も選ばれ建塔されたものです。
正式名／公衆用聴取施設
全高／三メートル
建塔／昭和七年十一月十九日

この案内板は人々の興味を煽ることに成功しているようで，「横浜」「ラジオ塔」と検索エンジンで検索すると，ここを訪れた多くの人が初期ラジオ像を思い起こすメディア遺構として野毛山のラジオ塔に関心を寄せる様子をいくつも見つけることができる。文化形式を確立し，私たちの生活にすっかり馴染んだラジオが，かつてどんな姿で人々の前にあらわれたのか。野毛山のラジオ塔は，そんな初期ラジオ像を窺い知る貴重な歴史資料として公園の片隅でひっそり保存されている。

このようにラジオ塔が人々の前にあらわれた頃，すなわち初期ラジオを再検討するため，関西に残るラジオ塔を調査し，その成果をまとめたのが拙稿「関西に残るメディア遺構――JOBK の建設したラジオ塔」である。ここでは，ラジオが私たちの生活に編入されていく過程を見直すため，ラジオ塔を企画・開発した日本放送協会の関西支部（以

図１　横浜市中区野毛山公園のラジオ塔
(2019 年 11 月 24 日筆者撮影)

図２　横浜市中区野毛山公園のラジオ塔案内板
(2019 年 11 月 24 日筆者撮影)

下，BK）の計画課／企画課の動きとその取り組みを検証し，ラジオ塔が創業間もない放送事業者の頭を悩ませた「聴取者加入廃止率」の抑制対策の一環で開発されたメディアだったことを指摘した。それはつまり，ラジオ塔が「常設受信拡大装置」という「「ラジオと共にある生活」の意義を，自らの生活の中に見出していくモノ」（丸山 2021:22）として人々の前にあらわれていたという忘却されたローカルな放送史である。BK 計画課／企画課の人々により構想されたラジオ塔は，1930 年に大阪の天王寺公園で具体化された。そして，その反響の大きさに応えるようにBK は，自らの管内に新たなラジオ塔を次々と設置していった。けれど，BK の考案したラジオ塔は，1932 年に聴取加入者 100 万突破という日本放送協会の記念事業に組み込まれたことで，その意味を大きく変容させていくことになる。それが，「国家非常時に放送を届けるのに社会的役割を担うモノ」として解釈し直され，「公衆用聴取施設」として全国の人々の前にあらわれたラジオ塔である（丸山 2021:21-22）。このように旧稿では，関西に残るラジオ塔を通して，第一にラジオが人々の生活に編入されていく過程を問い直し，第二に人々のラジオ熱を煽ることを目的に企画・設置されたラジオ塔を観察し，第三にラジオと人々の関係を構築した＜放送人＞について検討した。この時に残された課題として挙げたのが，100 万突破の記念事業とは別に，1939 年から 1940 年頃にかけて全国のラジオ塔が急増した理由（表１）を実証することの必要である。

これに応えるため，筆者は引き続き，全国に残るラジオ塔にかんする資料調査に取り組んだ。本稿は，この調査を通じて発見した新資料に基づき，旧稿で指摘したラジオ塔の意味変容の過程を批判的に検証することを試みる。そのために本稿では，次の三つの観点から 1932 年以降に AK 主導で建塔されたラジオ塔に検討をくわえていく。第一に聴取加入 100 万突破の記念事業を AK 総務部企画課の活動から問い直し，第二に野毛山に建設されたラジオ塔を観察し，第三に「一戸一受信機」キャンペーンの広告“塔”として国内外に建設されたラジオ塔について検討する。

２．ラジオの大衆化

２．１聴取加入者数 100 万突破の記念事業とラジオ塔の新たな役割

日本における放送事業は，1925 年に東京・大阪・名古屋の三都市に誕生した社団法人東京放送局（JOAK），社団法人大阪放送局（JOBK），社団法人名古屋放送局（JOCK）によって開始された。そして翌 1926 年，三局は逓信省による三局合同化の助言と指導を受け，同年８月に社団法人日本放送協会（以下，放送協会）を発足させると，それぞれ関東支部・関西支部・東海支部として放送協会に組み直された。ただし，電波にのってラジオに届く番組は，

表１　1930 年～1942 年におけるラジオ塔全国分布数

管轄/建設年度	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942
直轄			3	4				2	4		88		3
直轄			3	4				2	4		17		3
鉄道管内											71		
大阪（小計）	1	2	2	4		2		2	2	41	26		97
大阪	1	2	2	4		2		2	2	41	26		7
鉄道管内													90
名古屋（小計）				4							55		12
名古屋				4							26		12
鉄道管内											29		
広島（小計）			2	2		2	2			41	26		82
広島			2	2		2	2			41	26		13
鉄道管内													69
熊本			8			1	1		1	2	55		33
仙台			4							28	12		18
札幌（小計）			6	1			1		1		24	12	12
札幌			6	1			1		1		24	5	12
鉄道管内												7	
増加数合計	1	2	25	15	0	5	4	4	8	112	286	12	257
累積数	1	3	28	43	43	48	52	56	64	176	462	474	731
減少数					1						1		26
全国総計	1	3	28	43	42	48	52	56	64	176	461	474	705

『ラジオ年鑑』（昭和８年～18 年）および佐藤（2012）をもとに筆者作成

まだそれほど充実していなかったし（山口 2008:227），ラジオ受信機を自分で保守・管理できるような聴取者も多くはなかったから（島田 2021,2022），聴取加入者数は毎年右肩上がりで増加していたにもかかわらず，すぐ加入契約を廃止されるという「廃止率」の高さに放送協会は頭を悩ませていた。

そのような問題を抱えた放送事業だったが，AK 管内で開始された二重放送や満州事変にかんする時局放送などにより人々のラジオに対する関心はどんどん高まり，1932 年２月 16 日，全国の聴取加入者数はついに 100 万を突破することになる。それは日本における放送事業開始から７年，放送協会発足から６年というタイミングでの達成だった。ようやく悲願を叶えられたことに対する喜びからだろうか（表２），『ラヂオ年鑑昭和８年』には，100 万を突破した当日の支部別加入者数の記録が残されている。その詳細をここに記せば，関東支部は 439,817，関西支部は 318,450，東海支部は 109,717，中国支部は 36,657，九州支部は 44,142，東北支部は 30,920，北海道支部は 20,557 といった具合である（日本放送協会編 1933:70）。

100 万突破の記念事業は，そうした困難な道を進む放送協会を支持し続けた「関係各官僚，放送出演者，ラヂオ商工関係者，聴取者等各方面の絶大なる援助に対して何らかの聊か謝意を表すると同時に将来一層の協力を乞ふため」（日本放送協会編 1933:70）に企画されたものだった。そして，この記念事業の一つとして起案されたのが，「大都市の公園其の他全国五十箇所にラヂオ塔を建設し，公衆の聴取便宜の増進を計ると共に事業周知宣伝の一助」（日本放送協会編 1933:71）となるラジオ塔を建設するというプランである。この文面だけ見れば，BK 計画課／企画課が企図した「ラジオと共にある生活」の意義を伝えることを目的にもつ受信拡大の取り組みをそのまま模倣して，ラジオ塔を全国各地に建設していく計画だったように思われる。では，BK 計画課／企画課のアイディアに基づき，ラジオ塔建設に着手することになった AK は，どのようにその計画を進めていったのだろうか。関東甲信越のラジオ塔建設において中心的な役割を果たした AK 総務部企画課の動向を窺い知れる『関東支部彙報』を手がかりにこれを考えていくことにしよう。

表２　1925～1931 年度の全支部の許可数と廃止数の推移

	1925		1926		1927		1928		1929		1930		1931	
支部／年度	許可数	廃止数	許可数	廃止数	許可数	廃止数	許可数	廃止数	許可数	廃止数	許可数	廃止数	許可数	廃止数
関東	170,324	7,099	113,239	47,018	60,626	63,316	131,727	76,612	112,614	87,374	125,326	86,315	200,274	89,523
関西	65,668	2,810	40,668	23,945	47,378	23,029	81,777	30,936	85,127	44,516	96,376	44,144	137,888	49,943
東海	28,815	1,846	29,815	10,200	15,403	14,902	18,871	14,611	23,207	13,508	44,790	19,440	54,146	22,629
中国	0	0	0	0	0		21,629	2,613	9,594	6,197	8,967	6,203	18,688	6,585
九州	0	0	0	0	0		22,897	2,637	9,189	6,418	11,551	5,691	28,554	9,574
東北	0	0	0	0	0		20,137	2,181	8,393	4,973	8,369	6,306	12,948	5,451
北海道	0	0	0	0	0		16,830	2,946	5,237	4,423	5,718	4,529	13,110	5,071
合計	264,807	11,755	183,722	81,163	123,407	101,247	313,868	132,536	253,361	167,409	301,097	172,628	465,608	188,776
年度末現在数（全国）	258,507		361,066		390,129		564,603		650,479		778,948		1,055,778	
年度内許可数（全国）			102,559		29,063		174,474		85,876		128,469		276,830	

『昭和６年度第一次聴取者統計要覧』と『昭和７年度聴取者統計要覧』，及び，
『昭和８年度～16 年度業務統計要覧』と『昭和 21 年度業務統計要覧』をもとに筆者作成

２．２ラジオ塔建設に携わり始める AK 総務部企画課

1932 年３月に本部で決定した記念事業の方針に対し，初めてラジオ塔を建設することになった AK では，総務部企画課が中心になってその話し合いを進めた。1932 年９月５日に発行された『関東支部彙報』31 号には，その経緯が次のように記録されている。

施設

当支部管内にラヂオ塔の設置［企画課］

本年七月六日開催されたラヂオ塔設置打合会議に依り管内にラヂオ塔総計六基を建設することとなり，爾後諸般の調査研究を重ねて居たが，この程大體の成案を得たので実施に関する準備を進めて居るが其の大體の状況は左の通りである。

設置場所は東京横浜及長野静岡新潟三放送局並に前橋新設局各所在地の六箇所である，塔の様式は前記建設地当該各市公園課も委嘱し設計は可成設置箇所たる公園の風致に添ふこととした。受信機は AK 技術部に於て設計し，既に東京市の分は完成した。尚設置箇所に就ては東京市にありては隅田公園浅草側の広場と決定し既に設計を了へ目下工事中であるが塔の高さ約五米突の優美な様式の塔で，本月末には全部完成実施の運びとなる予定である。其他の各所に於ては各市の当局と交渉中であるが何も本年中には完成の見込みである。（社団法人日本放送協会関東支部 1932a:5）

なお，この話し合いの記録には，AK 管内に設置された新潟支所と長野支所でのラジオ塔建設にかんする動向も併記されている。昭和８年以降の『ラヂオ年鑑』や『日本放送協会史』にも，AK 管内のラジオ塔としてその一覧に記載されていることから，新潟支所と長野支所の取り組みについても簡単に触れておきたい。

新潟長野両市のラヂオ塔設置状況［新潟支所長野支所］

ラヂオ塔設置に関しては別項の通りであるが新潟市に於ては市土木課にて設置場所を選定中の處白山公園に決定し園内池中中に雅致ある四阿を作り其中に建設することとなり，目下立案中であるが設計完成後新潟支所と協議の上起工する手筈になっている。

又長野市に於ては予て市当局と協議中であったが設置場所は長野市城山公園噴水塔と長野商品陳列館の中間に設置のことに大體決定し設計及び工事は市に於て引受けることとなっている。（社団法人日本放送協会関東支部 1932a:5）

このとき，実際にラジオ塔が建設されたのは，東京の隅田公園，横浜の野毛山公園，新潟の白山公園の３箇所で，

長野の城山公園と静岡の清水公園，そして群馬県前橋市の前橋公園の３箇所は翌 1933 年に建設された。このように『関東支部彙報』には，AK 企画課の担当者と候補地の行政担当者との話し合いが深まっていく様子やラジオ塔建設の過程が克明に記されている。こうして進められた AK 管内のラジオ塔建設は，それまで AK 企画課が実施してきた「放送局の内容の宣伝に努め」ると同時に「受信機の組立取扱の講習会を開催し，学理的の実際講習」（日本放送協会編 1939b:103）により聴取者の理解を深めるといった宣伝活動とは比べものにならないほど，人々のラジオ熱を煽ることに役立ったようだ。その喜びを報告する同年 11 月５日発行の『関東支部彙報』35 号には，次のような文言が並ぶ。

ラヂオ塔によるラヂオの大衆化［企画課］

東京隅田公園にラヂオ塔が建設されて以来同塔によるラヂオの利用者が多くなって来た、ラヂオ体操の放送では大衆は朝のすがすがしい空気の中で河畔の広場で号令や音楽に合わせて手や足を動かしつゝ清新な気分を養ひ、野球放送にはラヂオ塔前の広場一帯は公園遊覧の人と自転車で埋まり壮烈なる戦況に血を沸かすなど益々大衆化して来たことは洵に慶ばしい情景といはねばならぬ。（社団法人日本放送協会関東支部 1932b:2）

このように関東支部時代の AK 資料に従って，聴取加入 100 万突破の記念事業の一環で AK 管内に建設されたラジオ塔の経緯をたどっていくと，建設予定地の各行政との話し合いは円滑に進み，想像以上に効果をあげた取り組みだったように見える。けれども，ことはそう順調には進まなかったようだ。1890 年に創刊した『横浜貿易新聞』(1890-1904）を起源にもつ地方新聞『神奈川新聞』（1942-）の前身『横浜貿易新報』（1906-1940）には，聴取者を増やしたい AK と横浜に放送局が設置されれば市民の文化的向上が期待できると大乗り気の横浜市当局，そして電波行政のすべてを掌握したい逓信省の三者の思惑がぶつかり合いながら野毛山のラジオ塔建設が進められていく様子を見つけることができる。そのように折衝を重ねる三者の姿から透けて見えるのは，放送協会の 100 万突破記念事業として全国一律に行われたはずのラジオ塔増設のプロセスに宿る放送のローカリティという「場所」の強度である。

３．横浜のラジオ塔

３．１「ハマっ子」のラジオ熱を煽る

1932 年７月 12 日発行の『横浜貿易新報』７面上部に位置する記事の「袖見出し」には，読者の目を引く言葉が並ぶ。いわく，「横浜に放送局を設置」して「ラヂオ大衆化を計画」していると「JOAK から秘密に提案」があり，その実現に向けて横浜市当局は「会議所等とともに実現促進運動を」行うつもりでいる。この記事の伝えるところによれば，東京からあまりにも近すぎることを理由に逓信省が二の足を踏む横浜放送局の設置に対し，AK は秘密にその計画を漏らし，それを実現するため横浜市に協力を求めてきたのだという。それは横浜市当局としても願ったり叶ったりの申し出だったから，村山昭一郎助役を中心に商工会議所などを巻き込んだ実現促進運動に着手することにしたというのだ。

東京中央放送局では横浜に放送局を設置するの意向があり最近横浜市当局に対して秘密にその計画を漏し計画の実現に助力して貰ひたいと言ってきたので市当局でも大乗気になり商工会議所等と協力して実現運動を起すことになった。JOAK としては横浜に放送局を設置すれば聴取者は極めて簡単な機械で聞くことができるので聴取者の激増を見るといふ見地から既に諸般の計画を立て予算案まで作成して大日本放送協会へ提出してあるまでにすすんでいる。(『横浜貿易新報』1932 年７月 12 日７面リード)

1925 年，AK がラジオ本放送をはじめたこの年の８月末，横浜市内で聴取加入を申し込んだ市民は 1,633 件という少なさだったが，その数は１年後には約４倍の 5,815 件にまで増加し（百瀬 2010:1）[(2)]，「ハマっ子」のラジオに対する関心は初期から高かったことがわかる。だが当時の現住戸数から見れば，その割合は６%に留まるもので

表３　横浜市の年度別聴取加入現在数と
100 世帯当りの加入割合

年度	年度末聴取加入現在数	100世帯当
1928	11,168	
1929	12,102	
1930	14,225	10.5
1931	20,083	14.8
1932	28,032	20.7
1933	34,560	25.4
1934	42,906	31.6
1935	53,160	35.8
1936	64,014	42.2
1937	79,614	52.5
1938	92,879	56.8
1939	112,645	63.8
1940	126,268	59.4
1941	137,413	64.6
1943	146,267	63.0
1944	147,407	69.3
1945	56,202	26.4
1946	75,576	49.1

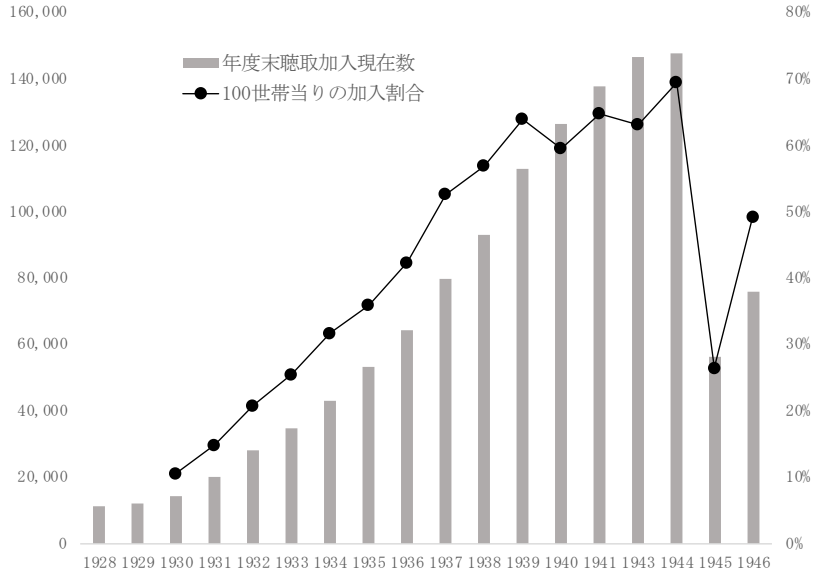


図３　横浜市の年度別聴取加入数と 100 世帯当りの割合

『昭和６年度第一次聴取者統計要覧』と『昭和７年度聴取者統計要覧』，及び，
『昭和８年度～16 年度業務統計要覧』と『昭和 21 年度業務統計要覧』，第 31 回～33 回『横浜市統計書』をもとに筆者作成

（百瀬 2010:1），聴取加入を申し込んでいない市民の方が大多数だった（表３，図３）。そのように市内全体の聴取加入の割合は決して高くはなかったが，１年で聴取加入者数が自然に倍増していることを思えば，横浜で放送事業の宣伝を実施する意義は十分ある。なお，AK が 1925 年から 1926 年の１年間に横浜で宣伝事業として実施した催し物は，1925 年４月 24 日に横浜商工会議所で行なったラジオ講演と 1926 年４月 25 日に横浜高等工業学校で行なった講演と音楽会の二度だけだ（越野 1928:199-201）。横浜は，AK 総務部企画課が注力せずとも聴取加入者数が自然に増加する，新しいメディアに好意的な視線を向ける地域だったのである。

けれども，電波行政を統制する逓信省は難色を示し続け，横浜放送局の設置はなかなか承認されない。そんな状況を打破したい AK は，新たな提案を横浜市当局に持ちかける。それが，横浜公園にラジオ塔を建設するという計画である。1932 年８月５日発行の『横浜貿易新報』７面には，「横浜公園へラヂオ塔建設 放送局の申出に市当局も大乗気」という見出しで，横浜の放送局設置にかんする続報が掲載されている。

横浜市内へ放送局が設置すべく市の当局に対して応援方の諒解を求めてゐる中央放送局では更に市民大衆の為めに横浜公園へラヂオ塔を建設したいとこの程村山助役に交渉を試みた。そこで大喜びの助役は土木局の井本嘱託と巨細な折衝を行はせているが市当局としては公園に対する施設の分散主義をとっている関係から之を「野毛山公園にして呉れまいか」と申出た。然し放送局としては人出の少い野毛山よりも横浜公園の児童遊戯場あたりが一番いゝといってゐるので話は結局横浜公園に落ちつくらしいが，そのラヂオ塔は公園に調和した設計による十五，六尺のコンクリート建で之に優秀な機械を備え付けやうといふ方針のものである。完成後は市に寄附するといふ条件だとゐう。（『横浜貿易新報』1932 年８月５日本文）

『横浜貿易新報』が，AK が横浜市当局に対しラジオ塔建設にかんする提案を行なったことを報じた時期と，1932 年７月６日に行われたという AK 内におけるラジオ塔設置にかんする打ち合わせとの動きは合致する。そして，同年８月 27 日付の同紙の３面では，横浜のラジオ塔建設に向けて場所の選定が終了し，いよいよその建設に着工す

ることが報じられている。

ラヂオ塔建設　敷地位置は野毛山か

中央放送局が横浜市内に建設しやうといふラヂオ塔は位置の選定と環境に相応しい施設方の設計方の依頼を受けた市の土木局で目下敷地位置の選定を設計中であるが敷地に関する土木局の意向は既報の如く野毛山公園入口最寄りの園内を適当として居り夫れと回答すれば放送局は市の設計によって直に着手する筈であるといふが略完成した設計では高さ十六尺，基石八尺四方鉄筋コンクリート花崗石張り燈篭形に建設される事になってゐる。

こうして横浜のラジオ塔は，1926 年に開放された野毛山公園に建設されることとなり，「ハマっ子」のラジオ熱を大いに煽るモノとして人々の前にあらわれることになった。

３．２「関外」に建設されたラジオ塔

1859 年，開港地が完成し，横浜は神戸と並ぶ国際的な貿易港としてその役割を担い始めることになる。図４「御開港横浜正景」が示すように，海から見て左側にある山手側（現在のマリンタワーや山下公園を擁する山下町周辺）は外国人居留地，右側にある本牧側（現在の JR 関内駅から横浜税関や神奈川県警本部などがある地区）は日本人商人たちの拠点とされた（中村 2020[2017]:67）。横浜港にやってきた外国籍の商人は，日本人商人が提供する国産商品のなかでも，特に生糸に目を輝かせ，次々と輸出するようになった。現在，国道 16 号線になっている神奈川・東京・埼玉・千葉の一都三県を結ぶ幹線道路の横浜から八王子までの区間は，遣水商人が甲州（山梨県）や信州（長野県）の養蚕農家から引き取った大量の生糸を横浜港へ運び入れた道の名残で，かつては「浜街道」や「絹の道」と呼ばれた（丸山 2018:31-32）。

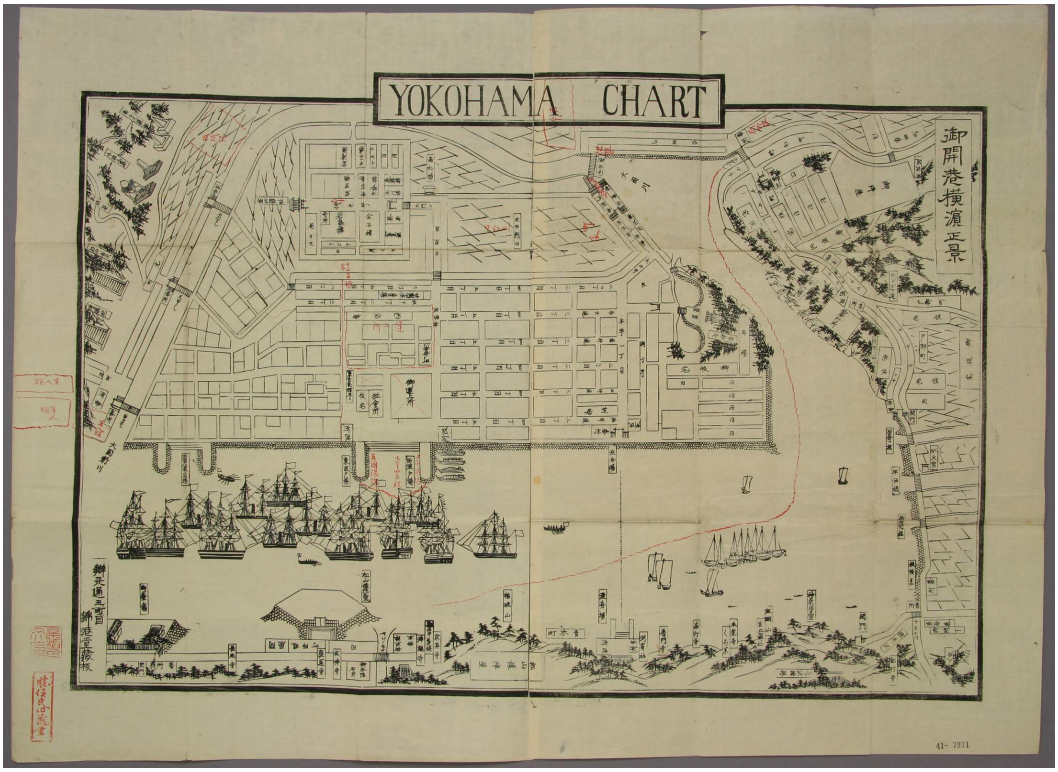


図４　『御開港横浜正景』（早稲田大学図書館古典籍データベースより 2022 年 1 月 30 日ダウンロード）

このように生糸の輸出で外貨を獲得し，国際交流も盛んに行われた横浜港において，吉田橋に設置された関門は国際的にも地政学的にも重要な意味をもつことになる。それが，外国人居留地を含む開港地と日本人居住区を結ぶ吉田橋を境に「内」と「外」を厳密に区分する理解の仕方である。すなわち，吉田橋を挟んで「開港地を関門の中という意味で「関内」，その反対の伊勢佐木町方面を「関外」と呼ぶ」（中村 2020[2017]:67）態度だ。いま，このように「関内」と「関外」を厳密に区分して生活する市民はほとんどない。実際，「ハマっ子」の筆者も，横浜スタジアムや横浜中央 YMCA，放送ライブラリーや NHK 横浜支局内の番組公開ライブラリーを利用する際に JR 関内駅で下車するから「関内」という呼称は用いるが，「関外」という呼び方は横浜市史を調査するまで耳にしたことはなかった。だが，ラジオ塔を建設するにあたり「関内」側にある横浜公園を希望する AK と「関外」側にある野毛山公園を推す横浜市というように，新しいメディアを受け入れる場所の選定にこうした土地の記憶が関係していた可能性は高い。これについては別途調査が必要だが，1932 年 11 月 20 日，AK 企画課と横浜市当局，そして逓信省の三者の様々な思惑が絡み合いながら野毛山公園に建設されたラジオ塔はいよいよ除幕式を迎えることになる。

1932 年 11 月 19 日付の『横浜貿易新報』7 面には，「野毛山の放送塔あす愈々除幕」という見出しで，ラジオ塔完成の喜びが次のように伝えられている（図５）。

横浜新名物の一つとして野毛山公園に竣工したラヂオ放送塔はいよゝ明廿日から公園を訪れる市民達を喜ばせてくれる一には午後零時半から盛大な除幕式が行はれ寄付者の東京中央放送局や横浜市役所の関係者が参列，大西市長も令嬢をつれて列席し型の如く式が進んで令嬢の手により除幕されるそれから市長がスキッチを入れる一をここで放送が開始される。

◇　◇

恰度その頃（一時五十分）には放送局のスタヂオから横浜の関内，関外，磯子三見番の芸妓連が出てラヂオに合はせて踊りをおどるといふ趣向になってゐる。放送塔には多数の市民が見にいって賑わふであろうが，亦市内各所でも横浜の唄の放送なので到る所ラヂオは相当の人だかりを見るであろう。（写真は放送塔）（『横浜貿易新報』1932 年 11 月 19 日本文）

野毛山の放送塔あす愈々除幕
市長の手でスキッチを切れば
美妓達は踊る
横濱新名物の一つ
勇敢な三人
少年を救助

図５　『横浜貿易新報』「野毛山の放送塔あす愈々除幕」

そして，休刊日の翌日曜日を空けて，同月 21 日付の同紙には，除幕式当日の様子が次のように報じられた。

JOAK が横浜市へプレゼントしたラヂオ塔の除幕式は秋晴の昨廿日午後零時三十分から紺碧のヨコハマ港を一眸に望む野毛山公園の東面チルドレン・グラウンドで寄附者の東京中央放送局や横浜市役所の関係者，ラヂオ業者等列席の上，一発の花火を合図に挙行された。（中略）中央放送局総務部長吉村外雄氏の挨拶あり同企画課長苫米地貢氏の手から村山助役へ寄附目録が贈呈され村山助役の喜びの挨拶あってのち来賓を代表して市議森田伊助氏の祝辞あって文化の進展に貢献する JOAK 贈る處の意義深きラヂオ塔の除幕式は終了した（『横浜貿易新報』1932 年 11 月 21 日本文）

なお，この時に AK から横浜市に贈呈されたという「寄附目録」は見つかっていない[3]。人見佐知子は，1930 年に BK 主導で建設された天王寺公園のラジオ塔寄贈にかんする「ラヂオ塔寄附収受ノ件」という資料を，大阪市立公文書館が保管する簿冊「寄附関係書類綴」（配架番号 4551）において確認し，この時のラジオ塔建設は各種費用を BK が負う形で進められていたことを指摘している（人見 2020）。各放送局とラジオ塔建設予定地の行政が，どのような手続きでラジオ塔建設を進めたのか検証するためにも，寄附目録の確認は重要だろう。調査を続ける。

４．支那事変と「一戸一受信機」キャンペーン

４．１ラジオ受信機の家庭普及という国策

放送協会にとって，放送事業を成り立たせるために欠かせないのは，ラジオ受信を許可した聴取加入者の存在であり，そうした聴取者の普及・開発によりその数を増やし続ける点にあることは『日本放送史』で述べられている通りだ。けれども，ラジオ放送の理念は，こうした経営的な面を充足させるだけではなく，国民の文化水準を向上させるという公共的な使命も負っている。そのような理解に基づき，支那事変以降に協会内外で提唱されはじめるのが，「一戸一受信機」（日本放送協会放送史編修室 1965:306）というキャッチフレーズのもと各家庭にラジオ受信機を必ず一台普及させることの必要性である。

1937 年７月７日に発生した盧溝橋事件を発端とする支那事変以降，放送協会の番組編成や事業方針には戦時色が加わりはじめた。それと並行して，政府の放送政策が放送内容や事業運営にも影響し始めると，ラジオは「国民に重要放送を“必聴”させるための」メディアへ位置づけ直され，放送協会はそれに必要な「各種施設」（日本放送協会放送史編修室 1965:324）の充実を求められるようになる。こうした政府による放送事業への指導・統制に対し，放送協会がその対策の一環として 1938 年～39 年頃に注力するようになるのが「一戸一受信機」キャンペーンだ。そして，そのキャンペーンの延長線上で全国に増設されたのがラジオ塔だったのである。表１で示すように，それまでラジオ塔建設の主な候補地とされてきた「神社・寺院・役場・市場・郵便局」の他に，1938 年からは「駅・渡船場など」も新たな建設候補地に加えられ，ラジオ塔は「警報そのほかの伝達放送に一役を買う」（日本放送協会放送史編修室 1965:481-482）モノとして人々の前に現れ始めることになる。実際，神奈川県にはこの時期，野毛山のラジオ塔に加えて，鎌倉市の鶴岡八幡宮に一基，横浜駅，大船駅，鎌倉駅，横須賀駅，藤沢駅，茅ヶ崎駅，平塚駅，国府津駅，小田原駅といった鉄道管内に合わせて９基のラジオ塔が建設されている。鉄道管内のラジオ塔にかんする資料はまだ見つかっていないが，乗降客数の多い駅が選ばれたことは間違いない。また，1938 年２月以降，放送協会は「山間辺地のラジオのない村 67 か村に対し，交流式または電池式受信機を寄贈したが，これもラジオ塔と同じ趣旨にもとづくもの」（日本放送協会放送史編修室 1965:482）と見なされ行われた事業だった。

４．２ラジオ塔の寄付事業

こうしてラジオ塔は，1938 年から 1940 年にかけて一気に日本全国に増設された。このようにラジオ塔を寄付する事業は全国一律で行われたが，この頃の様子を窺い知る資料として東京都公文書館に保存されている「寄附受領の件（品川聖蹟公園ラジオ塔用受信機１個）」および「寄附受領の件（新井薬師公園設置用ラジオ塔用受信機高声機）」，「寄附受領の件（日比谷公園設置用ラジオ塔及受信機１台）」（請求番号 322.G1.02）と「寄附受領の件（ラジオ塔ラジオ塔用受信機高声機）［日比谷公園］《財団法人日本放送協会会長小森七郎》」（請求番号 322.B1.06）の４

つがある。この中で最も早い時期に寄附されたのが品川聖蹟公園のものであることから，この資料を通して，どのようにラジオ塔の増設と寄付事業が進められたのか見ていくことにしたい。

全８ページで構成される「寄附受領の件（品川聖蹟公園ラジオ塔用受信機１個）」には，1938 年 12 月 21 日付に放送協会会長の小森七郎から東京市長の小橋一太宛にて提出された総第 7732 号が綴じ込まれている。そこでは，品川聖蹟公園に設置するラジオ塔寄付の申し出が，放送協会から行われたことを確認できる。寄付の内容としては，「ラヂオ塔用受信機」が「壹臺」と「高聲器」が「壹個」で，品川聖蹟公園のラジオ塔設備用として放送協会から東京市に対して寄付するので，受け取ってほしいという文面がこれに続く。そして，このラジオ塔内に設置する予定の受信機が故障した場合は，その修理を地元町内会で対処してほしいことが合わせて記されている。

この寄付申し出に対し，どのようなプロセスで公文書が作成されたのか定かではないが，昭和 13 年第 8319 号には，1939 年１月 10 日に提案が行われ，同月 16 日に裁決され，そして同月 19 日に施行されたことが記されている。そして，その隣の欄には，市長，助役，保健局長，保健局公園課長，保健局庶務課長，公園掛長，計畫掛長，工営掛長，事務掛長，そして庶務掛長らの名前が押印されており，これら人々の決済印をもってラジオ塔寄付の手続きは完了したということのようだ。なお，寄付された受信機やスピーカーの評価額は「貳百五拾圓也」と記されており，日本放送協会が，決して安価な機材を寄付していたわけではなかったことがわかる。これに対して東京市は，ラジオ塔を有難く受領して，公報に掲載したうえで感謝状を贈呈するということを公文書に残している。

この公文書からは，放送協会がどのようにラジオ塔増設の場所を選んでいたのかということや，場所選定やラジオ塔の意匠をどのように東京市と話し合って決めていたのかなどのプロセスは見えてこない。けれども，同年２月に新井薬師公園に対して，そして翌 1939 年４月に日比谷公園に対して新規のラジオ塔が次々と寄付・受領・設置されていることを鑑みると，放送協会と地方自治体は寄付・受領の関係を築くことを通して，ラジオから流れる「重要放送」を国民に「必聴」させる環境を急速に整えていったことがわかる。こうした政府の放送政策に沿った放送協会の対応とそれに加担する地方自治体の態度は新たな組織団体にまで波及し，BK が聴取者加入廃止の抑制を目的に考案した「常設受信拡大施設」のラジオ塔は，日本政府による植民地政策とも絡まり合いならが「重要放送」を「必聴」させるモノとして東アジアへ進出していくことになる。

５．おわりに

聴取加入者数 100 万突破の記念事業に組み込まれ，全国一律に建設されたラジオ塔の一基である野毛山のそれが，想像以上に，「場所」の固有性と密接な関係を築いたモノであったことを見た。さらにその後の 1938 年〜1940 年頃のラジオ塔建設の動きを見ていくと，「一戸一受信機」キャンペーンに組み込まれ全国各地に増設されたことが明らかになった。そこでは建設された理由や由来が国家政策に絡め取られたことで「非-場所」なモノへと変容していく過程も少しずつ見えてきた。このように人類学者の M. オジェ（1994=2002）が唱えた「場所」と「非-場所」の概念からラジオ塔の意味変容を捉えようとするとき，見えなくなるのはラジオ塔に期待し，その周りに集まった人々の表情である。

放送協会の資料では，多くの人がラジオ塔の周りに集まったことやその建設がラジオの大衆化に貢献したという記録をいくつも見つけることができる。けれども，それら資料は，なぜラジオ塔がラジオ受信機の普及に有効だと判断され全国的に増設されるに至ったのかという経緯や，聴取者が自らの生活の中でラジオ塔をいかに受容・消費していたのかという疑問には応えてはくれない。旧稿でも残された課題として挙げた後者の問題は，資料の限界から，なお未解決のままである。

この問題を解く糸口として，台湾・沖縄・インドネシア・タイに建設されたラジオ塔について検討した井川充雄（2021）や三島わかな（2014），村上聖一（2021a, 2021b），そして沼田尚道（2021）の研究は大いに参考になる。こうした世界に広がっていくラジオ塔の系譜にも目を配ることで，ラジオが人々の生活に編入されていく過程は，より鮮やかに描くことができるはずだ。別稿を期したい。

注

（1）『横浜貿易新報』の報道に従えば，野毛山のラジオ塔建塔日は，除幕式の行われた1932年11月20日である。本稿では，1932年11月19日および1932年11月21日付の『横浜貿易新報』を一次資料とし，案内板が記す建塔日の1日後を建塔日とする。

（2）社団法人東京放送局の解散当日である1925年８月20日の横浜市の聴取者数を，『東京放送局沿革史』は，有料と無料を合わせて6,350だったと記録している（越野 1928:196）。

（3）市政が施行された明治22（1889）年から昭和25（1950）年までの実態を把握するために必要な記録文書は，横浜市にはほとんど残っていない。その理由を高木邦雄は「市政の記録である行政文書が，このようにわずかしか残っていない原因として，関東大震災（大正十二年）及び第二次世界大戦によってほとんど消失したと考えられる」ことと，「本市の庁舎（特に本庁舎）がたびたび移転（表二参照）しており，移転のたびに当然保存されてしかるべき文書のうちかなりのものが廃棄されてしまったことも一つの原因ではないかと思われる」（高木 1978:57）と指摘する。なお，横浜市の本庁舎は2020年に再び移転した。

参考文献

人見佐知子，2020，「天王寺公園のラジオ塔」『民俗文化』32, 49-64.

井川充雄，2021，「台湾におけるラジオ塔―日本統治下の台湾におけるラジオの共同聴取」『応用社会学研究』63, 17-26.

Marc, A., 1994, *Pour une anthropologie des mondes contemporains*, Paris, Éditions Aubier.（＝2002，森谷工訳『同時代世界の人類学』藤原書店．）

丸山友美，2018，「「場所」と「非-場所」―二つのテレビ番組が映した道と街，そして人」塚田修一・西田善行編『国道16号線スタディーズ―二〇〇〇年代の郊外とロードサイドを読む』青弓社，23-42.

――――，2021，「関西に残るメディア遺構―JOBK の建設したラジオ塔」『福山大学人間文化学部紀要』21, 13-25.

三島わかな，2014，「戦前期沖縄でのラジオ放送―受信・聴取・発信をめぐって」『沖縄県立芸術大学紀要』22, 1-17.

村上聖一，2021a，「「南方放送史」再考①―大東亜共栄圏構想と放送体制の整備」『放送研究と調査』71(3), 40-57.

――――，2021b，「「南方放送史」再考②―現地住民向け放送の実態～蘭印を例に」『放送研究と調査』72(4), 70-87.

百瀬敏夫，2010，「昭和初期のラジオに関する一，二」横浜市史資料室編『市史通信』8, 1-4.

中村高寛，2020[2017]，『ヨコハマメリー――白塗りの老娼はどこへいったのか』河出書房新社.

日本放送協会編，1931，『ラヂオ年鑑　昭和６年』日本放送出版協会.

――――，1932，『ラヂオ年鑑　昭和７年』日本放送出版協会.

――――，1933，『ラヂオ年鑑　昭和８年』日本放送出版協会.

――――，1934，『ラヂオ年鑑　昭和９年』日本放送出版協会.

――――，1935，『ラヂオ年鑑　昭和10年』日本放送出版協会.

――――，1936，『ラヂオ年鑑　昭和11年』日本放送出版協会.

――――，1937，『ラヂオ年鑑　昭和12年』日本放送出版協会.

――――，1938，『ラヂオ年鑑　昭和13年』日本放送出版協会.

――――，1939a，『ラヂオ年鑑　昭和14年』日本放送出版協会.

――――，1939b，『日本放送協会史』日本放送出版協会.

――――，1940，『ラヂオ年鑑　昭和15年』日本放送出版協会.

――――，1941，『ラヂオ年鑑　昭和16年』日本放送出版協会.

日本放送協会放送史編修室，1965，『日本放送史・上』日本放送出版協会.

沼田尚道，2021，「昭和10年代日本の海外放送とタイ・バンコク―ラジオ放送聴取普及，ラジオ塔とラジオ体操が担ったこと」『新世紀人文学論究』4, 339-364.

佐藤紘司，2012，「学芸員ノート　「ラヂオ塔」についての考察」『NHK 放送博物館だより』58，19-25.
社団法人日本放送協会，1932，『昭和６年度第一次聴取者統計要覧』日本放送協会事業部.
――――，1933，『昭和７年度聴取者統計要覧』日本放送協会事業部.
――――，1934，『昭和８年度業務統計要覧』日本放送協会.
――――，1935，『昭和９年度業務統計要覧』日本放送協会.
――――，1936，『昭和 10 年度業務統計要覧』日本放送協会.
――――，1937，『昭和 11 年度業務統計要覧』日本放送協会.
――――，1938，『昭和 12 年度業務統計要覧』日本放送協会.
――――，1939，『昭和 13 年度業務統計要覧』日本放送協会.
――――，1940，『昭和 14 年度業務統計要覧』日本放送協会.
――――，1941，『昭和 15 年度業務統計要覧』日本放送協会.
――――，1943，『昭和 16 年度業務統計要覧』日本放送協会.
――――，1948，『昭和 21 年度業務統計要覧』日本放送協会.
社団法人日本放送協会関東支部，1932a，『関東支部彙報』31，（非公刊）.
――――，1932b，『関東支部彙報』35，（非公刊）.
島田匠子，2021，「放送初期のラジオ受信相談業務の実態―大阪中央放送局「特殊サービス」資料から①」『放送研究と調査』71(11)，86-87.
――――，2022，「戦前のラジオ受信機に関する啓発活動―大阪中央放送局「特殊サービス」資料から②」『放送研究と調査』72(1)，80-81.
高木邦雄，1978，「行政研究 横浜市の文書保管管理について―いくつかの問題点と改善の方向」『調査季報』58，56-68.
東京放送局沿革史編纂委員代表越野宗太郎，1928，『東京放送局沿革史』（非売品）.
山口誠，2008，「放送とオーディエンスの関係を再考する―新たな放送モデルと公共性へのメディア史的試論」『放送メディア研究』5，221-249.
『横浜貿易新報』「横浜に放送局を設置―ラヂオ大衆化を計画」（1932 年７月 12 日，７面）
――――「横浜公園へ―ラヂオ塔建設」（1932 年８月５日，７面）
――――「ラヂオ塔建設―敷地位置は野毛山か」（1932 年８月 27 日，３面）
――――「野毛山の放送塔あす愈々除幕」（1932 年 11 月 19 日，７面）
――――「早慶戦と濱自慢に―ラヂオ塔初見参」（1932 年 11 月 21 日，５面）
横浜市役所，1938，「ラヂオ聴取加入者」『第 31 回横浜市統計書昭和 11 年』横浜市役所，106.
――――，1939，「ラヂオ聴取加入者」『第 32 回横浜市統計書昭和 12 年』横浜市役所，118.
――――，1940，「ラヂオ聴取加入者」『第 33 回横浜市統計書昭和 13 年』横浜市役所，120.

付記

本稿は，2020 年度放送文化基金助成（人文社会・文化）及び JSPS 科研費 20K22157 の助成を受けた研究成果の一部である。

Media Remains in Kanto Area: Radio Pagoda built by JOAK

Tomomi MARUYAMA

This paper examines the radio pagodas erected by the Kanto Branch (JOAK) of Nihon-Hoso-Kyokai (NHK, Japan Broadcasting Corporation) after 1932 from three points. The first is to review the activities of the Planning Division of the General Affairs Department of JOAK in commemorating the one millionth subscription. The second is to observe the radio pagoda built in Nogeyama Park in Yokohama. The third is to examine the radio pagoda built in Japan and abroad as advertising "towers" for the "One house, one receiver" campaign. Through the above work, this paper reveals the process by which radio pagodas were transformed from objects that had a close relationship with the specificity of "place" to "non-place" objects whose reasons and origins were entangled in national policies.

【Keywords: Radio Pagoda, Media Remains, JOAK, Production Studies】

妊産婦のメンタルヘルスに係わる要因

日下部　典子
（心理学科）

妊産婦の多くがうつ傾向にあり，反すうがうつ傾向に関連していることが明らかとなっている（日下部，2020）。そこで，本研究は，妊婦 100 名（平均年齢歳）を対象に，妊産婦のメンタルヘルスに係わる要因として，反すう，被援助志向性の関係を明らかにすることを目的とした。その結果，抑うつ傾向には反すうと被援助志向性が影響しており，「反すうの統制不可能性」と「被援助志向性に対する懸念」が正の相関関係であることが明らかとなった。

【キーワード　　妊産婦　抑うつ傾向　被援助志向性　反すう】

【問題と目的】

妊産婦のメンタルヘルスの問題は，産後うつ病や出産後の抑うつ系統，育児ストレス等と関連していることが明らかとなっている。育児ストレスへの対応は少子化対策の影響もあり，研究，介入も進んでいるが，妊産婦への心理面に焦点を当てた介入はまだ多いとは言えない。しかし，妊娠中のメンタルヘルスは出産後のメンタルヘルスと関連していることからも（例えば，岩谷・北東・若林・吉川・成瀬，2001），重要な課題だと考えられる。またこれまでの調査結果から，妊娠中にも抑うつ傾向が高い人がいることは明らかとなっているが（日下部，2018，2020），妊婦のメンタルヘルス，抑うつ傾向等への自治体による調査，あるいは支援に繋げる事業は未着手である。

ところで，一昨年からの新型コロナ感染症は妊産婦にどのような影響を与えているのであろうか。乳幼児の母親の発達相談では，子どもを外に出すことの不安から，本来であれば子育て広場，近隣の公園等で子ども同士の関りがほとんどなくなっていること，また同年齢の子どもの様子を目にすることがなく，自分の子どもの発達についての不安が大きくなっていることを訴える母親が増加している。妊娠中の女性も，新型コロナ感染症への感染を避けるために，外出を控え，そのことが妊娠や出産への不安，メンタルヘルスの問題につながっている可能性がある。

抑うつや不安の維持要因の一つとして反すうがあり，その関連が明らかとなっている（Nolen-Hoeksema,1991；高野・丹野，2010）。反すうとは「その人にとって，否定的・嫌悪的な事柄を長い間，何度も繰り返し考え続けること（伊藤・上里，2001）」であり，過去のネガティブな状況を繰り返し考え続けることを止められないことが問題となっている。また，抑うつを軽減するコーピングとしてサポート希求があるが，このサポート希求に関連する要因として被援助志向性があり，被援助志向性が低いとサポート希求が難しい（日下部，2018）。そこで本研究では，抑うつ傾向と反すう，被援助志向性の関連を検討し，妊婦のメンタルヘルスを改善するための介入への要因を探ることを目的とする。

【方　法】

調査対象者　調査対象者は妊娠している女性 100 名（平均年齢 35.07 歳，*SD*=3.95）であった。

調査方法　2020 年 12 月に，調査会社（楽天リサーチ）を通じてインターネット調査を実施した。

質問紙の内容　年齢，健康状態，就労状況，住居形態，妊娠週数，第何子を妊娠中であるか等の対象者の属性を尋ねた。さらに，子どもに関すること，自分自身に関することを「配偶者」あるいは「専門家」に相談する程度についても尋ねた。

抑うつ状態のスクリーニングテスト　妊婦の抑うつ状態を測定するために K6 調査票日本語版（川上・近藤・堤他，2006）を用いた。6 項目に対して，「0　全くない」～「4　いつも」の 5 件法で回答を求めた。9 点以上でうつ病の可能性があると判断される。

反すうの測定　反すうを測定するために，ネガティブな反すう尺度（伊藤・上里，2001）を用いた。本尺度は 11 項目から構成され，ネガティブな反すうの持続傾向を測定するネガティブな反すう傾向「ネガティブな反すう（7 項目）」と，ネガティブな反すうのコントロール感を測定する「ネガティブな反すうのコントロール可能性（4 項目）」が測定できる。「1　当てはまらない」～「6　当てはまる」の 7 件法で回答を求めた。

被援助志向性の測定　日下部（2018）による被援助志向性尺度を用いて，被援助志向性を測定した。13 項目からない，「被援助志向性に対する肯定的態度」と「被援助志向性に対する懸念や抵抗感」の 2 因子で構成され，「1. 全く当てはまらない」～「5. よく当てはまる」の 5 検討で回答を求めた。

解析方法　IBM SPSS Ver.22.0 を用いて分析を行った。

倫理的配慮　質問への回答は無記名であった。調査実施時に研究目的，回答は無記名であり，回答するか否かは自由であること，回答を途中でやめることは自由であることが説明された。回答をもって，研究への同意とした。

【結　果】

調査対象者の属性及び抑うつ傾向について　調査対象者の年齢は 20 歳～41 歳で，平均年齢 35.07 歳（*SD*=3.95）であった。対象者の 90%が健康状態は良好であり，就労状況はフルタイムで就労している回答者が 36%，パートタイム就労が 20%，自営業が 3%，無職 38%で，何らかの形で就労している者が過半数であった。家族形態については，夫婦のみが 39%，夫婦と子どもが 52%，その他（両親等と同居）が 4%，不明 5%であった。子どもがいると回答した者が 59%で，その内訳は子ども一人が 37%，子ども二人が 17%，子ども三人が 5%であった。

K6 調査票日本語版の得点は，平均値 2.12（*SD*=.94）であった。回答者の抑うつ傾向を確認した結果，何らかの抑うつ・不安の問題がある可能性が 32%に認められ，26%はうつ・不安障害が認められる，すなわち半数以上に何らかの抑うつ傾向が認められる結果でであった。

調査対象者の抑うつ傾向と反すう及び，被援助志向性との関係について　調査対象者の抑うつ傾向と反すう及び被援助志向性の関係を検討するため，Pearson の積率相関係数を算出した結果（Table 1），抑うつ傾向は「ネガティブな反すう傾向」，「反すうコントロール不可能性」，「被援助志向性への懸念や抵抗感」と中程度の正の相関関係が認められたが，「被援助志向性への肯定感」とは相関がなかった。また，「ネガティブな反すう傾向」は「被援助志向性への肯定感」，「被援助志向性への懸念や抵抗感」 と弱い正の相関関係が，「反すうコントロール不可能性」は「被援助志向性への懸念や抵抗感」とのみ弱い正の相関関係があった。また，子どもについて，あるいは自分についての相談を「夫」，「専門家」にするかと被演者志向性との関係を検討したところ，いずれも「被援助志向性への肯定感」が正の弱い相関関係にあること

が明らかとなった（r=.28, p<.05；r=.26, p<.05；r=.27, p<.05；r=.31, p<.001）。

次に抑うつ傾向を従属変数として，反すう，被援助志向性，妊産婦の年齢，家族関係，就労状況，健康状態を説明変数として重回帰分析を行ったところ，健康状態，反すう尺度，及び被援助志向性への懸念や抵抗感が抑うつ傾向に影響を及ぼすことが示された。

Table 1　抑うつ傾向と反すう尺度及び被援助志向性尺度の相関結果

	抑うつ傾向	①	②	③
①ネガティブな反すう傾向	.46***			
②反すうコントロール不可能性	.40***	.53***		
③被援助志向性への肯定的態度	.05	.20**	.04	
④被援助志向性への懸念や抵抗感	.40***	.24**	.28***	−.05

*** p<.001, **p<.05

【考　察】

本研究は，妊産婦の抑うつ傾向と反すう，被援助志向性の関連を検討し，妊産婦のメンタルヘルスを改善するための介入への要因を探ることを目的とした。K6 調査票日本語版の結果から，調査対象者の 58%が軽度から重度の抑うつ傾向にある可能性が示された。この結果は使用尺度が違うため，単純な比較は難しいが，従来の妊産婦の 1-2 精神疾患が疑われる先行研究に比べて高い数値であった。今回の調査は従来の調査と新型コロナ感染症が広がり，妊産婦だけではなく，多くの人が不安を強くしている中で実施されている。そのことが，この結果に影響している可能性はあると考えられる。このようなメンタルヘルスの状況は，妊産婦自身はもとより，胎児にも大きく影響し，また産後うつ病や育児ストレス等に強く影響すると思われることから，メンタルヘルス改善への介入が必要であることが示唆された。

次に抑うつ傾向と反すう及び被援助志向性の関係を Pearson の積率相関係数で確認した結果，抑うつ傾向と反すう及び被援助志向性への懸念や抵抗感は有意な正の相関関係にあることが明らかとなった。すなわち，反すうを多くする妊婦ほど抑うつ傾向が高くなることが示され，この結果は，大学生を対象とした先行研究の結果と同様であった（長谷川・根建，2011；伊藤・上里，2001）。また，被援助志向性の「被援助志向性への懸念や抵抗感」が抑うつ傾向と関連していることも示された（日下部，2018）。また，抑うつ傾向やストレス軽減に関わる要因の一つであるソーシャル・サポート希求と被援助志向性の関係を検討した結果，被援助志向性の肯定感と正の相関関係にあることが明らかとなったことから，サポートの抑うつ軽減への有効性を伝えるだけではなく，援助をしてもらうことへの肯定感を高める介入が重要であることが示唆された。

最後に，重回帰分析で抑うつに影響する要因を検討した結果，健康状態，反すう尺度，及び被援助志向性への懸念や抵抗感が影響を及ぼすことが示されたことから，抑うつ傾向を軽減するにはネガティブな反すうを減らしていくことや援助への懸念への介入が必要であると考えられる。また反すうコントロール不可能性がネガティブな反すうと正の相関関係にあることから，コントロールできるような方法を認知行動療法を用いて学んでもらうことも重要であると考えられる。ただし，反すうに関しては最近ポジ

ティブ，ネガティブに関わらず抑うつや不安と関係がある可能性が研究されている。本研究ではネガティブな反すうのみを扱っていることから，今後ポジティブな反すうに関しても検討することが求め有れる。

【引用文献】

Cod J. & Holden J. (2003). Perinatal Mental Health: A Guide to the Edinburgh Postnatal Depression Scale (EPDS). London: The Royal College of Psychiatrists

（コックス Ｊ． ＆ ホールデン Ｊ． 岡野 禎治・宗田 聡（訳）(2006). 産後うつ病ガイドブックーＥＰＤＳを活用するためにー 南山堂）

長谷川　晃・根建　金男(2011).抑うつ的反すうとネガティブな反すうが抑うつに及ぼす影響の比較　パーソナリティ研究　*19*, 270-273.

伊藤 拓・上里　一郎（2001）．ネガティブな**反すう尺度**の作成および**うつ**状態との関連性の検討 カウンセリング研究，*34*，31-42.

川上　憲人・近藤　恭子・堤　明純他（2006）．うつ病・自殺 予防対策のためのスクリーニングツールとしての Ｋ 6 /Ｋ10 調査票の妥当性．日本公衆衛生学会総会 抄録集 *64*，85.

日下部　典子（2019）．妊婦の抑うつ傾向と被援助志向性　福山大学人間文化学部紀要,*19*,76-82.

丸山 知子・吉田 安子・杉山 厚子・須藤 桃代（2001）．妊娠期・出産後 2 年間の女性の心理・社会的状態に関する調査 第 1 報 妊婦の心理・社会的状態 女性心身医学会雑誌，*6*，93-99.

Nolen-Hoeksema, S. (1991). Responses to depression and their effects on the duration of depressive episodes. Journal of Abnormal Psychology, *100*, 569-582.

Factors related to the Mental Health of Pregnant Women

Noriko KUSAKABE

Rumination and help-seeking tendency are said to be factors to affect depressive tendencies. The purpose of this study was to clarify the relationship among depressive tendency, help-seeking tendency and rumination in 100 pregnant women. As a result, it was clarified that 58% of the subjects had a high tendency to be depressed. It was also found that there are significant positive correlation among depressive tendency, help-seeking tendency and rumination. These results suggest that intervention to reduce rumination and resistance to help-seeking would be useful in reducing the depressive tendency of pregnant women.

【Key words: pregnant women, depressive tendency, help-seeking tendency, rumination】

ふくやま草戸千軒ミュージアムでの心理学式お化け屋敷の取り組み
－広島県立歴史博物館と福山大学の博学連携の事例の紹介－

皿谷 陽子[1]・石橋 健太郎[2]・大杉 朱美[1]・宮崎 由樹[1]・平 伸二[1]
([1]心理学科，[2]広島県立歴史博物館)

本稿では，広島県立歴史博物館 (ふくやま草戸千軒ミュージアム) と福山大学心理学科と協働で開催したお化け屋敷イベントについて報告する。このイベントは人文学および心理学研究のアウトリーチを目的に実施した博学連携の一事例である。草戸千軒の町並みを復原した博物館の展示室において，ナイトミュージアムイベントとして小・中学生を対象に実施した。お化け屋敷のストーリーは草戸千軒町遺跡の発掘調査や研究成果に基づき，お化け屋敷の仕掛けは犯罪心理学の研究知見に基づき作製した。イベント後の参加者アンケートの結果から，イベント参加者の高い満足度がうかがえた。また，草戸千軒町の歴史や心理学に対する理解が深まったという回答も見られた。このイベントはサイエンス (および人文知) コミュニケーションの新しい形を示すものと言える。
【キーワード　　博学連携　お化け屋敷　草戸千軒町】

1. はじめに

地方大学では大学の特色を活かした地域貢献が各地で行われている。本学も例に漏れず，各学部学科で様々な地域貢献活動が行われている。著者らの所属する心理学科は，広島県東部の大学で，科学捜査研究所出身の実務家教員の下で実践的に犯罪心理学が学べる学科である。本学科では，こうした実践的な犯罪心理学教育の一環として地域での防犯活動（例えば，地域安全マップ作製活動）を盛んに行っている。地域安全マップ作製活動は，「犯罪が行われやすい場所（危険な場所）」，「犯罪が行われにくい場所（安全な場所）」のように，場所に注目した防犯活動であり，フィールドワークを通じ子どもの防犯意識を醸成する活動である（平，2007；濱本・平，2008)。他にも，広島県警と協働でのサイバー防犯ボランティア活動 (皿谷・大杉・平，2020) も実施している。このような犯罪心理学に基づく活動の他，地域のこども園と協働した子育て支援活動 (赤澤・皿谷・青野，2019)，大学生による発達に困難さを持つ子どもへ学習支援 (金平・堤・米倉，2016) など，本学科の専門性を活かした地域に根差した様々な活動も行っている。

地域貢献といっても活動内容は様々ある。文部科学省の「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」には，高等教育と社会の関係として，①研究力の強化，②産業界との協力・連携，③地域との連携が挙げられている。本論文では，地域にある機関との協働事業として「博学連携」を取り上げる。「博学連携」とは，博物館と教育機関が連携することである。博学連携の一事例として，2021 年 7 月に実施した広島県立歴史博物館 (ふくやま草戸千軒ミュージアム) との協働企画「草戸千軒お化け屋敷－歴史×心理学－」の活動を報告する。このイベントは，福山市に実在した草戸千軒町の実物大復原 (博物館内「よみがえる草戸千軒」) を舞台に行った。また，本学心理学科の特色でもある犯罪心理学の知見を活かしたお化け屋敷の仕組みを作製した。本イベントは，ナイトミュージアムイベントとして地域の小中学生を対象に開催し，楽しくこの地域の歴史と心理学を学んでもらうという人文学および心理学のアウトリーチ活動も目的としていた。ここでは，3 か月の準備および実施概要と，犯罪心理学をはじめとする心理学的知見を用いた仕掛けがイベント参加者にどのような効果をもたらしたのかも合わせて報告する。

犯罪心理学の犯罪不安研究の知見を取り入れお化け屋敷の仕組みを作製した。具体的には，犯罪に遭いそうな場所と感じやすい，①見通しが悪い，②誰かが隠れていそう，③（自分が）逃げることができない，④周りに人通りがない，⑤悪いことが起きた噂があるといった場所　(小野寺・桐生・羽生，2002；小野寺・桐生・樋村・三本・渡邉，2002；小野寺・桐生，2003）をお化け屋敷内に設けた。イベント体験後に，犯罪不安研究の説明やお化け屋敷内のどの場所にそれが反映されていたかを参加者に紹介し，参加者の防犯意識向上につなげることを目的とした。

さらに，イベントの怖さや楽しさといった感情の変化に加え，体験した感情変化に伴う記憶の変容にも着目し，主観的評価を問うアンケートと記憶の正しさを問う再認テストの両方を実施し，その関連についても分析を行った。

財津（2007）によると，恐怖感情は記憶情報の検索時に効果を持つとしており，恐怖感情を取り除くことができれば記憶情報の検索の可能性が高まるとしている。本イベントにおいては，「お化け屋敷」として恐怖を疑似体験してもらう際の「怖さ」，「楽しさ」，「満足度」による記憶力との関係を確認することとした。

2. 広島県立歴史博物館（ふくやま草戸千軒ミュージアム）の概要

広島県立歴史博物館は，瀬戸内海のほぼ中央，広島県福山市の福山城公園内の文化ゾーンに位置する。芦田川の中州で見つかった中世の町として全国的に有名な草戸千軒町遺跡を中心に，瀬戸内地域の民衆生活と文化に視点を当てた博物館として，1989 年 11 月に開館した。

草戸千軒町遺跡は，1926 年に始まった芦田川の流路付替え工事で見つかり，河川改修工事が計画され，事前に発掘調査が実施された。30 年以上にわたる発掘調査により，鎌倉時代から室町時代にかけて繁栄した町の跡とともに，そこで居住した人々の生活の実態を示す膨大な資料が出土した。博物館では，草戸千軒町の町並みを復原し，「よみがえる草戸千軒」として常設展示している。

さらに，博物館では，草戸千軒町遺跡の調査・研究の成果を中心に，広島県を中心とする瀬戸内地域の「交通・交易」や「民衆生活」に関する資料を収集・展示し，この地域の歴史と，そこに暮らした人々の生活や文化に対する理解を深めてもらうことを目的として，さまざまな活動を展開している。また，地域の生涯学習拠点としての機能を担うべく，講演会や体験学習会など，利用者の多様なニーズに応えるための行事も企画・実施している (広島県教育委員 HP) 。

3. 開催したイベント「草戸千軒お化け屋敷－歴史×心理学－」について

3. 1. イベント「草戸千軒お化け屋敷－歴史×心理学－」の概要

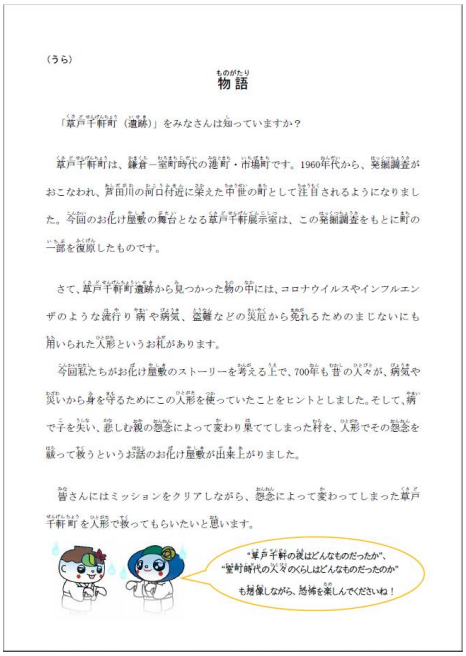
開催趣旨　「お化け屋敷」イベント開催により，草戸千軒町遺跡や心理学についての学習機会を提供することを目的とした。

開催日時　2021 年 7 月 24 日・31 日，8 月 7 日・14 日・21 日 (5 日間) の 18：00－20：00 を予定した。しかし，新型コロナウイルス感染症の感染拡大による広島県の自粛要請が入り，7 月 24 日と 31 日の 2 日間のみの開催となった。

参加者　この地域の小・中学生およびその保護者に対し開催を広報し，各回 10 組 (1 組，最大 5－6 名程度) を抽選した。

イベントコンセプト　本イベントのコンセプトは，歴史×心理学であった。楽しみながら，歴史と心理学の学習ができるイベントとし，具体的な内容については企画計画期間内に著者らを含め，イベントへの協力が可能な学生 (以下，学生スタッフ) との打ち合わせにより決定した。

企画計画期間　2021 年 5 月 13 日から 7 月 23 日までの間，合計で 23 回の打ち合わせを行った。5 月初旬に本学科の学生に呼びかけ，学生スタッフを募った。著者らと学生スタッフは，草戸千軒町があった当時の時代背景について第 2 著者から説明を聞き，時代背景にあったイベントのストーリーを創作した。ストーリーの内容は学生スタッフが作成した (図 1) 。なお，ストーリーについては，次年度以降の開催におけるイベント内容の露見を防止するため，本稿での詳細な説明は控えることとする。お化け屋敷の仕掛けは犯罪心理学の知見を応用した。


（うら）

物語

「草戸千軒町（遺跡）」をみなさんは知っていますか？

草戸千軒町は、鎌倉－室町時代の港町・市場町です。1960年代から、発掘調査がおこなわれ、芦田川の河口付近に築えた中世の町として注目されるようになりました。今回のお化け屋敷の舞台となる草戸千軒展示室は、この発掘調査をもとに町の一部を復原したものです。

さて、草戸千軒町遺跡から見つかった物の中には、コロナウイルスやインフルエンザのような流行り病や病気、盗難などの災厄から免れるためのまじないにも用いられた人形というお札があります。

今回私たちがお化け屋敷のストーリーを考える上で、700年も昔の人々が、病気や災いから身を守るためにこの人形を使っていたことをヒントとしました。そして、病で子を失い、悲しむ親の怨念によって変わり果ててしまった姿を、人形でその怨念を鎮って祓うというお話のお化け屋敷が出来上がりました。

皆さんにはミッションをクリアしながら、怨念によって変わってしまった草戸千軒町を人形で祓ってもらいたいと思います。

"草戸千軒の民はどんなものだったが、
"室町時代の人々のくらしはどんなものだったのか"
も堪能しながら、恐怖を楽しんでくださいね！

図 1. イベントの創作物語（配布資料）

イベントの流れ　当日の参加者の流れとしては，まず，参加者が博

物館の一室に集合し，イベントの事前説明を受けた。説明の内容としては，①草戸千軒町があった時代背景，②時代背景にそったストーリー (図1) ，③イベント中に参加者が行うミッションの説明であった。そして，一組ずつ順次，学生スタッフが会場入り口まで誘導を行った。誘導された参加者は，イベントの導入動画を視聴した。そして，学生スタッフより小型の懐中電灯が渡され，メイン会場である草戸千軒を実物大で復原した展示室を順路に沿って回った。最後に学生スタッフが別室に案内し，イベント内で使用されていた心理学の理論について担当の学生スタッフが説明を行った。その後，参加者にアンケートへの回答を依頼し，回答が済み次第，参加者は退館した。

3. 2. アンケート概要

アンケート回答者　2021 年 7 月 24 日（土），　31 日（土）の草戸千軒お化け屋敷に参加した親子を対象とした。7 月 24 日は子ども 11 名，保護者 9 名，7 月 31 日は子ども 16 名，保護者 10 名であった。両日合わせて，イベント参加者は，子ども 27 名（平均年齢 10.1 歳，男子 16 名，女子 11 名），保護者 19 名（平均年齢 38.8 歳，男性 8 名，女性 11 名）であった。

アンケート内容　アンケート内容は以下の通りであった。①お化け屋敷の怖さの程度（1 : 非常に怖かった－7 : 非常に怖くなかったの 7 件法），②お化け屋敷の怖かったことの具体的な部分について（1 : 会場が暗くて周りが見えないところ，2 : 会場の家の中に誰かが隠れていそうなこと，3 : 会場に入ったらお化け屋敷体験が終わるまで出られないこと，4 : 会場に自分たちしかいないこと，5 : 事前の動画のような出来事が起きたかもしれないこと，6 : その他），③お化け屋敷の楽しさの程度（1 : 非常に楽しかった－7 : 非常に楽しくなかったの 7 件法），④お化け屋敷の楽しかったことの具体的な部分について（1 : メッセージを交換したこと，2 : 事前に見た動画，3 : 草戸千軒遺跡が会場だったこと，4 : お化け役が人間だったこと，5 : お化け役が追いかけてきたこと，6 : お化け役の動き，7 : 効果音があったこと，8 : 歴史の話があったこと，9 : 心理学の話があったこと，10 : その他），⑤お化け屋敷の満足度の程度（1 : 非常に満足した－7 : 非常に満足しなかったの 7 件法），⑥一番驚いたことについて，⑦一番怖いと思ったことについて，⑧お化け屋敷への感想の 8 つの内容で構成されていた。また，再認テストとして，イベント会場の 10 カ所の記憶を問う選択式アンケートを行った 。なお，再認テストについては，本イベントの詳細が記載されているため，本稿での説明は控える。再認テストの回答者は子ども 16 名，保護者 9 名であった。

4. アンケート結果

アンケート結果を当イベントに対しての「4.1.怖さについて」,「4.2.楽しさについて」,「4.3.満足感について」,「4.4. その他 (自由記述)について 」,「4.5. 再認テストについて」についてまとめた。

4.1　イベントに対する「怖さ」について

イベントの怖さに関する項目について，子どもと保護者それぞれで項目選択肢の度数を算出した。子どもに関しては，25 名 (96%) の子どもが本イベントに対して怖かったと評価していた (図 3) 。「誰かが隠れていそう」がその評価の 1 番の理由 (全回答数の 37%)であった (図 4) 。保護者に関しては，19 名 (100%) の保護者全員が本イベントに対して怖かったと評価していた (図 5) 。また，子どもと同様に，「誰かが隠れていそう」がその評価の主因 (全回答数の 41%) であった (図 6) 。その他，お化け役の外見や行動への恐怖，音響 (急な音) に対する恐怖を理由に挙げた自由記述回答もあった。

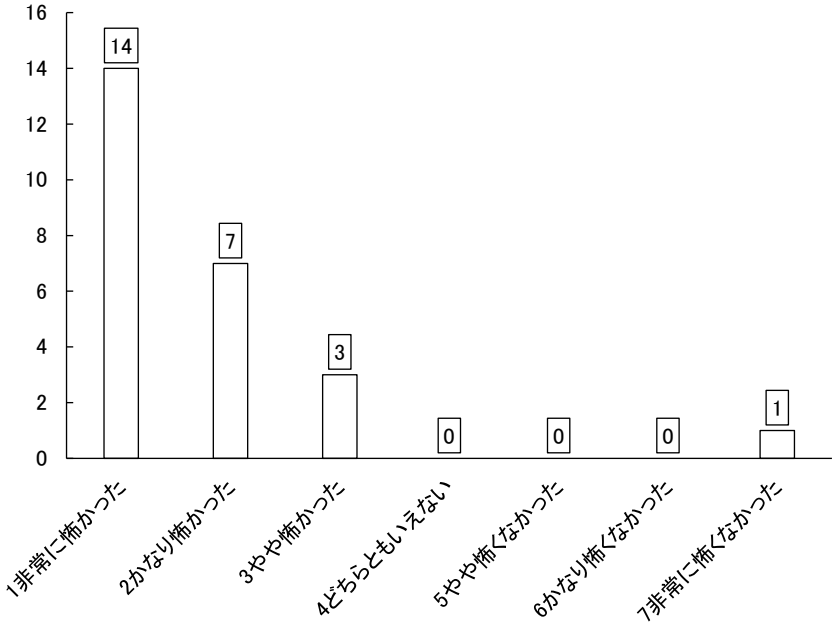


図3. 子どものイベント全体に対する「怖さ」への回答の度数（子ども_人数（*N*＝25））

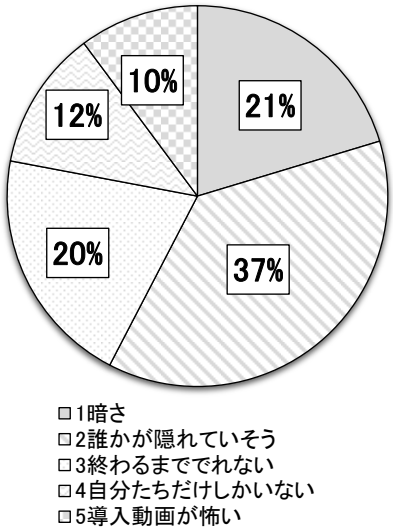


図4. 子どもの怖さを感じるポイントの回答の割合
（子ども_%（回答数*N*＝95））

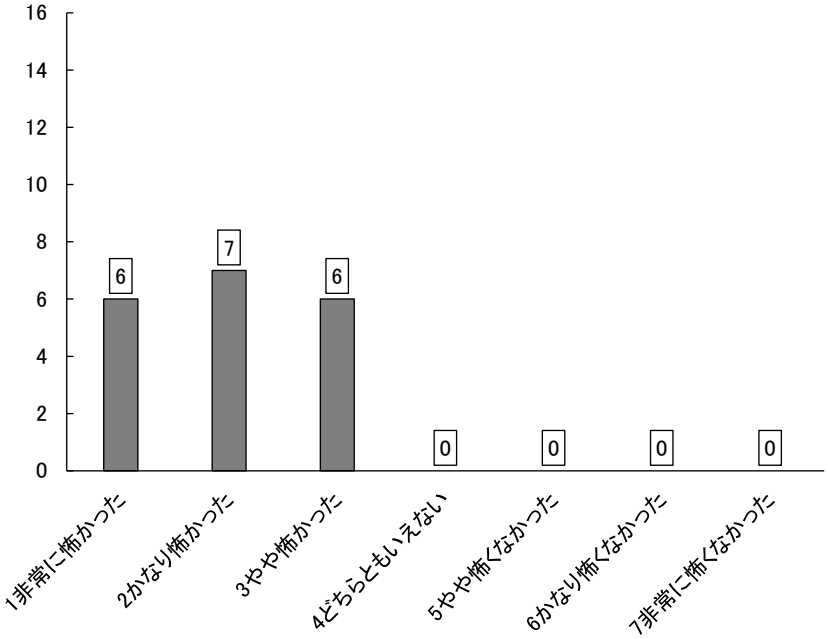


図5. 保護者のイベント全体に対する「怖さ」への回答の度数（保護者人数（*N*＝19））

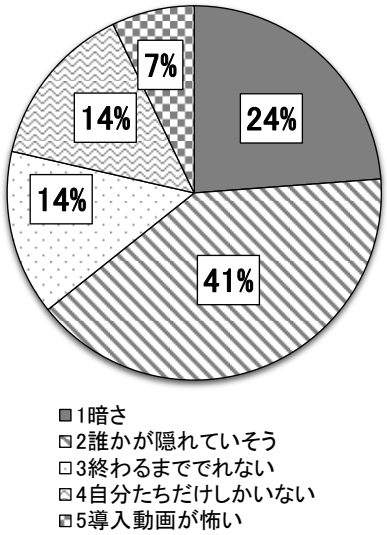


図6. 保護者の「怖さ」を感じるポイントの回答の割合
（保護者_%（回答数*N*＝42））

4.2. イベントに対する「楽しさ」について

イベントの楽しさについても同様に度数を算出した。子どもに関しては，22 名 (81%)が本イベントに対して楽しかったと評価していた (図 7) 。保護者も 17 名 (94%) が本イベントを楽しかったと評価していた (図 9) 。子どもも大人も「お化けの動き」をその楽しさの主因に挙げていた (子どもの全回答数の 19%，図 8; 大人の全回答数の 16%，図 10)。その他，イベント同伴者の驚き様が面白いといった自由記述回答もあった。なお，本イベントを通じて歴史を学ぶことができた (子どもの全回答数 5%，保護者の全回答数 10%) という回答や，心理学を学ぶことができた (子どもの全回答数 11%，保護者の全回答数 9%) という回答も見られたため，年齢に関わらず，お化け屋敷を楽しみつつ歴史や心理学に親しむことが出来た参加者もいたことが分かった (図 8，図 10)。

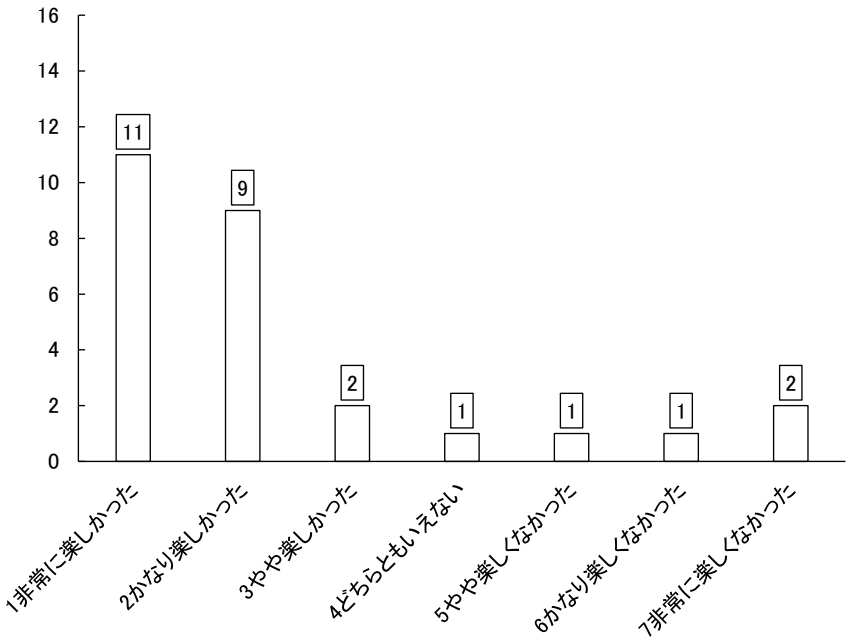


図7. 子どものイベント全体に対する「楽しさ」への回答の度数（子ども_人数（*N*＝27））

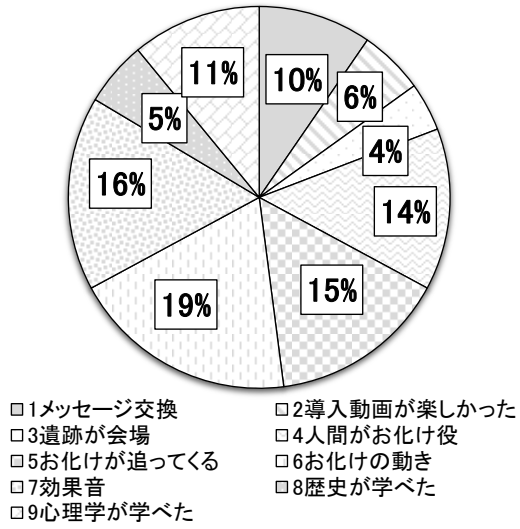


図8. 子どもの「楽しさ」を感じるポイントの回答の割合（子ども_%（回答数*N*＝73））

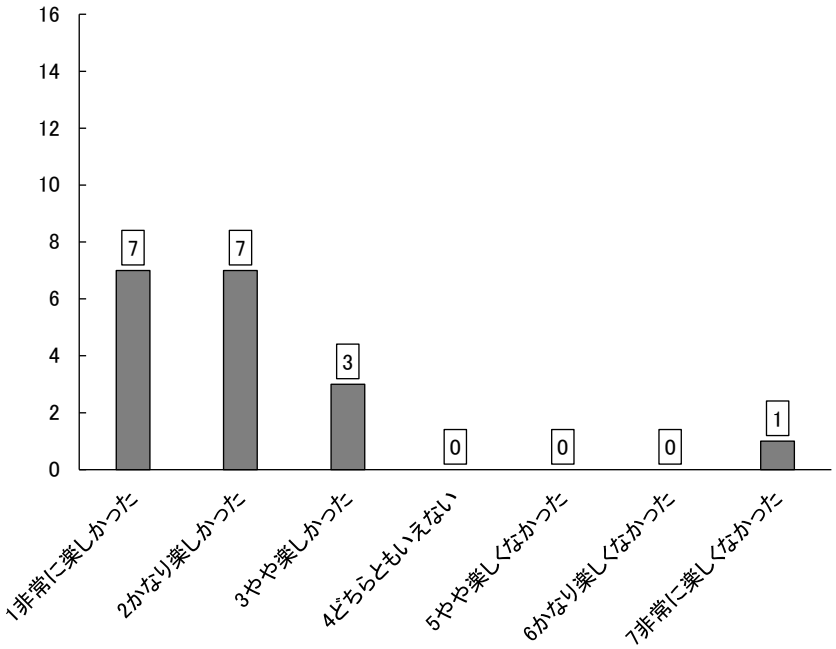


図9. 保護者のイベント全体に対する「楽しさ」への回答の度数（保護者人数（*N*＝18）

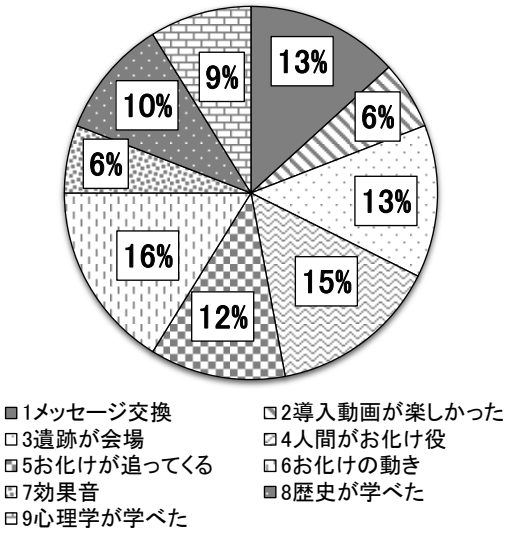


図10. 保護者の「楽しさ」感じるポイントの回答の割合（保護者_%（回答数*N*＝70））

4.3. イベントに対する「満足感」の程度について

イベントの満足感に関する項目について，子どもと保護者それぞれで項目選択肢の度数を算出した。まず，子どもに関しては，21 名 (88%) 子どもが本イベントに対して満足した評価しており，3 名 (12%)が本イベントに対して満足していない評価をしていた (図 11) 。次に，保護者に関しては，17 名 (84%)が本イベントに対して満足した評価をしており，1 名 (6%) が本イベントに対して満足していない評価をしていた (図 12) 。

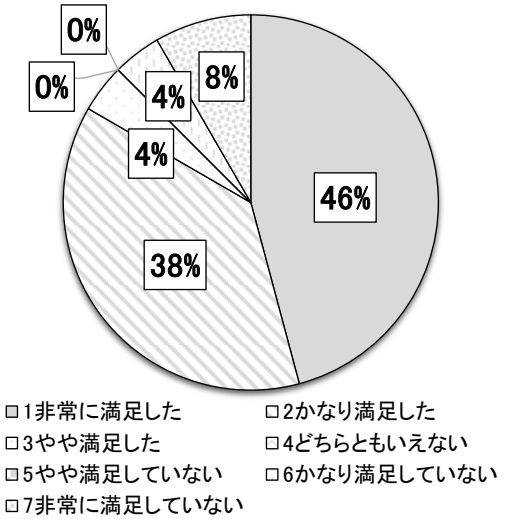


図11. 子どものイベント全体に対する「満足感」の回答の割合（子ども_%（回答数*N*＝24））

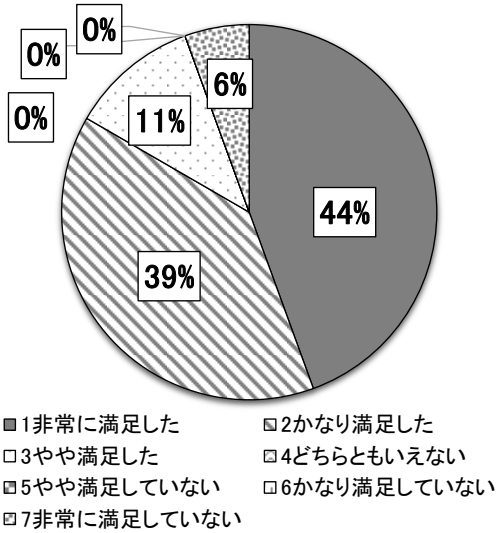


図12. 保護者のイベント全体に対する「満足感」のへ回答の割合（保護者_%（回答数*N*＝18））

4.4.　その他（自由記述）について：「一番驚いた所」，「一番怖かった所」，「イベントへの感想」

お化け屋敷において一番驚いた所や一番怖かった所として，「後ろからお化けが来た」，「お化けに追いかけられた」，「急にお化けが出てきた」，「急に音が鳴った」など，想定していなかったことについて驚いた怖かったという回答が多くみられた。また，「イベント全部が驚いた怖かった」といった回答もあった。

イベント全体としては，「面白かったけど，やっぱり怖かった。」，「怖かったけど，楽しかった。」といった感想が多かった。その他，当イベントに対して，「お化け屋敷としても面白かったし，歴史のことについても学べたので，とても良かった」，「少し怖かったけれども終わったらあまり怖くなかった。昔のことがよくわかった。」「興味深い企画だと思います。学生さんたちも一生懸命運営されていて頭が下がります。次回があれば，是非また参加させてください。」，「毎年行って欲しい」，「勉強になりましたし，非常に楽しかったです。また来たいです！」や「ドキドキしたし，わくわくして面白かった。また来てみたい。」，「知識として役に立ったし，内容は怖いのも，おもしろかったのもあってまた行きたいなと思いました。」といった回答があった。

また，新型コロナウイルス感染症の流行に基づく自粛によるストレスの発散につながったという感想も中にはみられた。具体的には，「今の状況でどこへも行けない中，久しぶりに家族で参加できるイベントに参加できてありがたかったです。衣装やお面もよかったです！！」や「ストレス発散になりました」，「子どもがとても怖がっていて，普段みれない様子を伺えて，いい体験をさせてもらいました。父と母だと子どもは父を選ぶのだなと，びっくりしました。」といった感想があった。

4.5. 再認テストについて

イベント内の記憶の正しさを問う再認テストと本イベントで感じた感情の関係をみることとした。まず，10 問の記憶課題について，子ども，保護者それぞれの回答数による正答率 (正答への回答者数/問に対する回答者数×100) を表 1 に示した。

表 1. 子どもと保護者の再認テスト各問の正答率 (%)

問題番号	問題場所	子どもの回答者数（人）	子どもの正答率 (%)	保護者の回答者数（人）	保護者の正答率 (%)
1	入口から２つ目の家のお化けについて	16	75.0	9	100.0
2	円形ホールの出口のお化けの様子	15	86.7	9	66.7
3	橋の上の様子	14	57.1	8	62.5
4	船の上にあったものについて	14	50.0	9	100.0
5	市場でおきたことについて	15	80.0	8	75.0
6	2 つ目の橋のマネキンの数について	15	13.3	8	12.5
7	井戸の周りの出来事について	15	86.7	9	88.9
8	一番奥の右側の家のお化けが着ていたものについて	15	6.7	9	0.0
9	作業場でのお化けの様子	14	78.6	9	66.7
10	ミッション後の出来事について	15	80.0	9	88.9

表 1 の正答率をみると，子どもと保護者の両者において，問題 6 と問題 8 の正答率が総じて低かった。その 2 問以外では，正答率が 50%以上あった。さらに，記憶成績とイベントに対する怖さ，楽しさ，満足度得点の関係を検討するため，怖さ，楽しさ，満足度それぞれを得点化 (最大評定値に＋1 の後，参加者の評定値を引き算出) し，各感情の得点とした。怖さ得点の平均値 (*SD*) は，子ども 6.2 点 (*SD* = 1.27，*n* = 25) ，保護者 6.0 点 (*SD* = 0.79，*n* = 19) であった。楽しさ得点の平均値 (*SD*) は，子ども 5.6 点 (*SD* = 1.81，*n* = 27) ，保護者 5.9 点 (*SD* = 1.39，*n* = 18) であった。満足度得点の平均値 (*SD*) は，子ども 5.8 点 (*SD* = 1.80，*n* = 24) ，保護者 6.0 点 (*SD* = 1.38，*n* = 18) であった。また，子ども，保護者を合わせた各項目の平均得点 (*SD*) は，怖さ得点 6.2 点 (*SD* = 1.27，*n* = 25) ，怖さ得点 6.2 点 (*SD* = 1.27，*n* = 25) ，怖さ得点 6.2 点 (*SD* = 1.27，*n* = 25) であった。

得点化した怖さ，楽しさ，満足度の得点と記憶成績について相関分析を行った。その結果，楽しさ得点（$r = .41$）と満足度得点（$r = .46$）は，それぞれ記憶成績と正の相関が認められた。これより，当イベントを楽しんだ人，当イベントに満足した人の方が，イベントの場面をよく覚えていたと推察する。

5. 今後の展望

本論文では，2021 年に広島県立歴史博物館 (ふくやま草戸千軒ミュージアム) と協働で開催した草戸千軒お化け屋敷のイベント概要とイベント後に実施したアンケート結果を報告した。アンケート結果から，本イベントはお化け屋敷としての怖さを感じつつも，楽しさ，満足感が得られるものであったことが分かった。また，参加者のこの地方の中世の歴史や心理学に対する理解を深めるものであったことも示唆された。つまり，本イベントの参加者は，お化け屋敷を楽しみながら，歴史や心理学を学ぶことができたと思われる。このように，本イベントはサイエンス (および人文知) コミュニケーションの新しい方法を示した。

本イベントのアンケートにより，本イベントに参加した子ども，保護者の大多数が楽しさ/怖さを感じておりかつ満足度も高いイベントであったことがうかがえる。Andersen, Schjoedt, Price, Rosas, Scrivner, & Clasen (2020) は，お化け屋敷における恐怖と楽しみの関係を生理的・行動的指標に基づき評価している。その結果，ちょうど良い恐怖は楽しさを生起させるとし，お化け屋敷（レクレーション的恐怖の遊び）は参加者個人の内的動機によって楽しい活動として認識されているとしている。本イベントにおいても，「怖かったけど面白かった」という感想から，参加者に対して“ちょうど良い恐怖”が提供できたと推察する。また，イベントの付加価値として，県立博物館としての歴史に関する知識の提供，大学 (心理学科) としての心理学という専門知識の提供が，参加者のイベントへの感想からもうかがえる (4.4 を参照) 。さらに，本イベントのアウトリーチ研究として，再認テストの正答率とイベントへ

の「怖さ」,「楽しさ」,「満足度」が記憶力に与える影響について調査を行った。本アンケートの結果において，当イベントを楽しんだ人，当イベントに満足した人の方が，イベントの状況をよく覚えていたと考えられる。白澤・石田・箱田・原口（1999）によると，楽しいなどといったポジティブなエネルギー覚醒が高いほど，記憶検索課題の成績が向上するとしており，本イベントにおいても大多数の参加者が「楽しい/満足度」を感じていることから，同様の効果が見られ，再認テストの得点が高くなったと考えられる。

最後に，大学が地域と連携し地域貢献を行うことについての意義を考える。野澤 (2016) の大学の地域連携の活動領域について調査を行っている。野澤 (2016) の結果より，大学の地域連携の取り組みとしては，①公開講座の開催，②学校外の事業（講演会や講師派遣）への協力，③社会・地域問題への対処や地域活性化活動への教職員・学生の派遣の 3 点が多く，「一番注力しているもの」では，一番に社会・地域問題への対処や地域活性化活動への教職員・学生の参画，次いで公開講座の開催であり，地域課題に対処していることが示されている。また，地域連携活動の課題点として，一番に教職員の不足，次いで充分な収入や外部資金を確保できないということである。他にも「教員が社会・地域連携の取組みに忙殺される」,「社会や地域の求めるニーズに学校が対応できない」,「教員の研究活動に結びつかない」,「インセンティブの欠如により教員の参加意欲が低い」といったことも挙げられている。大学教員も人間であるため，個人により思想やキャパシティは異なるであろう。大学が地域貢献を行うためには，大学での環境の調整や効率化を思考していく必要があるだろう。

本イベントは今回が初めての試みであった。そのため進行の滞りが生じるなど幾つかの課題も見つかった。また，イベント参加者の防犯意識向上を目的に犯罪心理学の不安研究を応用したお化け屋敷の仕組みを設けたが，参加者の防犯意識がイベント後に高まったかどうかは測れていない。その他，新型コロナウイルス感染症の流行によりイベント期間が短縮されるといった問題も生じた。こうした課題や問題はあったものの，地域の博物館と大学が連携を行うことで，各々の専門性を掛けあわせた地域貢献が可能であることを示したイベントであったことが示された。本イベントで得られた経験や知見は，今後の博学連携の参考となるであろう。

謝辞

イベント企画運営，当日スタッフとして参加頂いた，福山大学人間文化学部心理学科，福山大学大学院人間科学研究科の有志の皆様に心から感謝いたします。また，本学メディア・映像学科の村上亮斗さんには動画編集にて，枝廣和憲先生には事前の打ち合わせにてご助力頂きましたことを感謝申し上げます。そして，イベント企画運営においてご尽力いただきました広島県立歴史博物館（ふくやま草戸千軒ミュージアム）の館長の佐藤哲義様，学芸課長兼草戸千軒町遺跡研究所長の木村信幸様，学芸員の猪熊はるの様，岸本晴菜様に心より感謝申し上げます。また，本アンケートの趣旨を理解し快くご回答頂いたイベント参加者の皆様にも感謝申し上げます。

福山大学学生スタッフ有志一覧（学年は 2021 年 7 月時点）

学年	氏名	学年	氏名	学年	氏名
4 年	岡田 諒子	3 年	黒瀬 雛鈴	3 年	安井 雅浩
4 年	加賀山 海咲	3 年	河野 隼也	2 年	遠原 恵
3 年	赤枝 沙紀	3 年	小林 歩夢	2 年	金城 カリーナ 香音
3 年	今田 愛蘭	3 年	田中 葵	2 年	田中 朋実
3 年	上岡 明日香	3 年	野村 奈央	1 年	鎌田 真名実
3 年	宇山 真依子	3 年	平 雄一朗	1 年	田淵 優子
3 年	大石 楓	3 年	福長 桃花	院生	柿木 里予
3 年	小川 響	3 年	藤本 一真	院生	白尾 綾音
3 年	金崎 智宏	3 年	光盛 綾華		

引用文献

赤澤 淳子・皿谷 陽子・青野 篤子 (2019). 大学における子育て支援活動の現像と意義―子育てステーションにおける地域貢献・社会連携事業について― 福山大学こころの健康相談センター紀要, (1) , 79-89.

Andersen, M. M., Schjoedt1, U., Price, H., Rosas, E. F., Scrivner, C., & Clasen1. M., (2020). Playing with fear: A field study in recreational Horror. *Psychological Science*, *31*(12), 1-14.

濱本 有希・平 伸二 (2008). 大学生による小学生への地域安全マップ作製指導とその効果測定 福山大学こころの健康相談室紀要, (2) , 35-42.

平 伸二 (2007). 地域安全マップの作成とその効果 福山大学こころの健康相談室紀要, (1) , 35-42.

広島県教育委員会ホームページ ホットライン教育ひろしま ふくやま草戸千軒ミュージアム (広島県立歴史博物館) https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/rekishih/introduce.html (2021 年 12 月 18 日閲覧)

金平 希・堤 俊彦・米倉 裕希子 (2016). 発達に困難さを持つ子どもに関する支援ニーズ調査：地域での包括的な支援システム構築を目指して 福山大学こころの健康相談室紀要, (10) , 61-72.

文部科学省 (2018). 平成 30 年度文部科学白書 https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201901/detail/1421755.htm (2020 年 10 月 15 日閲覧)

小野寺 理江・桐生 正幸 (2003). 空間情報が犯罪不安に及ぼす影響 犯罪心理学研究, *41* (2) , 53-62.

小野寺 理江・桐生 正幸・羽生 和紀 (2002). 犯罪不安喚起に関わる環境要因の検討―大学キャンパスを用いたフィールド実験― 人間・環境学会誌, *8* (2) , 11-20.

小野寺 理江・桐生 正幸・樋村 恭一・三本 照美・渡邉 和美 (2002). 犯罪不安喚起の諸要因を検討する実験室研究のアプローチ 犯罪心理学研究, *40* (2) , 1-12.

皿谷 陽子・大杉 朱美・平 伸二 (2020). 大学生によるサイバー防犯ボランティア活動の現状と課題 福山大学人間文化学部紀要, (20) , 22-33.

白澤 早苗・石田 多由美・箱田 裕司・原口 雅浩 (1999). 記憶検索に及ぼすエネルギー覚醒の効果 基礎心理学研究, 17 (2) , 93-99.

財津 亘 (2007). 恐怖感情が目撃者の記憶情報検索に及ぼす効果 心理学研究, *77* (6) , 504-511.

A Psychology-based Haunted House Event at Fukuyama Kusado Sengen Museum: An Introduction to a Case for Museum-University Collaboration between Hiroshima Prefectural Museum of History and Fukuyama University

Yoko SARAGAI, Kentaro ISHIBASHI, Akemi OSUGI, Yuki MIYAZAKI, Shinji HIRA

This report examined the impact of a haunted house event held in collaboration between the Hiroshima Prefectural Museum of History (Fukuyama Kusado Sengen Museum) and the Department of Psychology at Fukuyama University. This event was a museum-university collaboration with the aim of outreach to humanities and psychological research. The event was held at night for elementary and junior high school students in the exhibition room of the museum, where the streets of the Kusado Sengen Town were recreated. The story of the haunted house was based on research regarding the ruins of Kusado Sengen Town, and the trick featured in the haunted house was created based on research on criminal psychology. Results of a post-event questionnaire showed that participants were highly satisfied with the event. Furthermore, they reported that the event improved their understanding and knowledge about the history of Kusado Sengen Town, and the field of psychology. This event represents a new style of communication in the science and humanities domain.

【Keywords: museum-university collaboration, haunted house, Kusado Sengen Town】

執筆者紹介（目次掲載順）

脇忠幸	人間文化学部
丸山友美	〃
日下部典子	〃
皿谷陽子	〃
石橋健太郎	広島県立歴史博物館
大杉朱美	人間文化学部
宮崎由樹	〃
平伸二	〃

紀要編集委員会

村上亮	人間文化学部
中野美奈	〃
渡辺浩司	〃

福山大学人間文化学部紀要第 22 巻
令和 4 年 3 月 1 日発行

発行所　福山大学人間文化学部
福山市学園町 1 番地三蔵
〒729-0292　電話 084-936-2111（代）
発行人　福山大学人間文化学部長
日下部　典子